

佐藤彰一教授に聞く

1. 研究者へ
2. 研究者として
3. 教育者として
4. COE プロジェクト・リーダーとして
5. 最後に

佐藤彰一教授は、1945年山形県に生まれる。中央大学法学部、早稲田大学文学研究科を経て、78年に日本学術振興会奨励研究員、79年に愛知大学法経学部助教授、87年に名古屋大学文学部助教授を歴任し、91年同教授となり、現在に至る。その間、カン大学人文学部、パリ第10大学、パリ社会科学高等研究院にて研鑽し、2003年から翌年にかけて名古屋大学高等研究院院長を務める。学位論文は『修道院と農民 会計文書から見た中世形成期ロワール地方』（名古屋大学出版会 1997）であり、本書により2002年度の学士院賞を受賞する。論集として、『ポスト・ローマ期フランク史の研究』（岩波書店 2000）と『中世初期フランス地域史の研究』（岩波書店 2004）がある。その他の代表的著作として、池上俊一との共著である『世界の歴史10 西ヨーロッパ世界の形成』（中央公論社 1997）と、『歴史書を読む 『歴史十書』のテキスト科学』（山川出版社 2004）がある。

クリオ：今日は、われわれ『クリオ』編集部のインタビューをお引き受けくださり、どうもありがとうございます。

佐藤：最初に、このような機会を与えていただいたことに対して『クリオ』の編集部の皆さんにお礼を申し上げるとともに、正直面映い気持ちもしています。本日のインタビューが『クリオ』誌に掲載されるということですが、それを読まれた方が、何かをそこから引き出しうるような、実のあるお話ができるかどうか自信はありません。ただ30年間にわたり西洋中世史家として積み重ねてきた研究の本体と、そしてその研究にまつわる付随的なこととお話することで、あるいは若い皆さんに何か研究上の、または研究生活上の考える手がかりのようなものを示唆し、お役に立てるのではないかと思います。このような懇切なお招きを快諾した次第です。意を尽くしたお話ができるかどうかわかりませんが、よろしくお願いします。

1. 研究者へ

(1) 生い立ち

クリオ：最初に、先生の生い立ちについてお聞かせいただけないでしょうか。

佐藤：私は1945年7月28日、つまり太平洋戦争が終わる約2週間前に、山形県東田川郡余目町という、人口2万5千人くらいの日本海に近い小さな田舎町に生まれました。一昨年の町村合併のため、自治体としての余目町は庄内町になって消滅しましたが、字名としてはまだ余目という名前は残っています。山形県は内陸地方と海岸地方で大きな文化の違いがあります。この部屋（東京大学西洋史学研究室・教員談話室）には、東京大学西洋史学研究室の歴代の先生がたの肖像写真が掲げられていますが、ここにも写真のある日本を代表する中世史家であった堀米庸三先生は、内陸地方のご出身でした¹。私の生まれた庄内地方は、かつては米作が盛んな地方でした。現在、その米作は

¹ 堀米庸三は、1913年に山形県河北町谷地に生まれる。神戸商科大学と北海道大学を経て、1956年に東京大学文学部に赴任する。大学を退いて間もない1975年に死去。代表作は『西洋中世世界の崩壊』（岩波書店 1958）、『正統と異端』（中央公論社 1963）、『中世の光と影』（文藝春秋 1967）であり、

産業的に隆盛を極めているとは言えませんが、私が大学に入るまで過ごした時期は、日本全体の経済の水準からすれば、相対的に豊かな恵まれた土地柄であったと思います。日本一の大地主と言われた本間家は、余目町から10キロほど北の酒田という港町を拠点にしていました。酒田は、北前船の寄港地、廻船業や米穀の積み出しで賑わった、江戸時代から繁栄した町です。堺のような町民支配の港町で、三十六人衆という旦那衆がパトリアートとして差配していました。港町らしく開放的で自由な雰囲気横溢している、今から振り返ってみるとそんな印象を持っていますね。それに対して、南に酒田と同じくらい離れたところにある鶴岡は、酒井藩14万石の城下町で、藤沢周平の小説でしばしば舞台になる架空の藩、海坂藩のモデルで有名な町です。比喩的に言いますと、この2つの地方都市が庄内地方のいわば楕円の2つの焦点になっていて、しかも片や商人町、片や城下町とそれぞれの町のカラーが非常に対照的に出ています。さらに鶴岡の背後には月の山、月山が、酒田の背後には鳥海山がありまして、自然景観までディコトミックです。私の生まれた町は、ちょうどその中間にあるローカルな交通の要衝で、かつては天領に属していました。ローカルな話で恐縮ですが、私の町の中学から高校に進学する場合は、酒田の進学校に行くか、鶴岡の進学校である鶴岡南高校に行くかという選択肢があるのです。酒田派と鶴岡派とでも言いましょうか。それで酒田派の私は酒田東高校に進みましたが、同じ中学の友人でも鶴岡が好きなのは鶴岡に行くというように、奇妙に二分法的な土地柄です。余談ですが、庄内の人々の民俗性は、森敦の小説『われ逝くものごとく』で実に見事に描かれているように思えます²。

クリオ：どのような子供時代を過ごされたのでしょうか。

佐藤：高校までは地元で過ごしました。私の生家は呉服屋で、両親と祖父母、それに妹と弟がいて、それに住み込みの店員たちやお手伝いさんがいたものですから、いつも夕食は10人以上いたでしょう。賑やかで、大家族的な雰囲気の中で育ちました。祖父は50歳頃に引退して隠居身分、また商家で両親とも働いていたので、どちらかという祖父に可愛がられて育てられました。長男でもあり、家業のならいからすれば私が跡継ぎであると皆が考えたのは自然ですね。祖父が新聞を読んでいるとき、胡座をかいた膝のところに座って、祖父が読む新聞を目で追って字の読み方を教えてくれるようにせがんだと、後で聞かされました。字を覚えるのは割と早く、小学校に入る前には意味は分からないなりに、新聞が読めたようです。そんなことは大して自慢にもなりません(笑)。それで、普通の子供が読むような子供版の世界名作は買ってもらいましたが、とくに印象に残っているのが、カバヤという菓子会社がどういうオマケの付け方をしたのか、もう詳しいことは覚えていませんが、世界名作文学の子供ダイジェスト版のようなものを景品に呉れたことです。5月の農繁期になりお百姓さんが農作業に忙しくなると、祖父母は店が暇になりますから、ひと月ほど湯治に出るのが習慣になっていました。月山の麓にある肘折温泉のある旅館が定宿で、小学校に上がるまで祖父母のお供をして、山深い湯治場生活をさせられました。昭和20年代の前半ですからせいぜいラジオくらいで、テレビはもちろんまだなかった時代です。家から離れた秘境の湯治場ですから遊び友達ができるわけではなし、毎日3度の食事をするように風呂に入る老人と一緒に湯船に浸かるのにもすぐに飽きて、仕方なしにカバヤに投資して、子供向けの名作シリーズを手に入れては読んでいました。ほかに時間を潰す手だてがないのですから。祖母は書物を読むのが好きで、誰の訳かは忘れてしまいましたが——円地文子訳の可能性が大きい——、湯治には『源氏物語』を持っていき、熱心に読んでいました。これは私が大学に入ってからのことでしたが、それでも、中学に入るまでに文学少年になっていたというような、早熟な子供ではなかったですね。

死後主要論文が『ヨーロッパ中世世界の構造』(岩波書店 1976)としてまとめられた。現在堀米の生家は、紅花資料館となっている。

² 森敦『われ逝くものごとく』(講談社 1991)。森敦は1912年に長崎県に生まれる。1973年に『月山』で第70回芥川賞を、1987年に『われ逝くものごとく』で第40回野間文芸賞を受賞した。1989年に死去。

クリオ：何か打ち込まれていたことはありますか。

佐藤：小学校6年くらいから野球に熱中しました。巨人・西鉄時代で、長嶋選手が神宮のヒーローから巨人の若いヒーローになった頃です。多少自己分析するなら、少年期から思春期への移り変わりのころにありがちな、思春期の不安から来る肉体主義的ニヒリズム、体を動かすことへの陶酔のようなものであったのかもしれませんが。もっとも野球は頭を使うゲームですが。それと、小学校6年のとき、一念発起してやろうとしたことがありました。それは手製の「人名事典」をつくるという計画です。近くの文房具屋から、コクヨの茶色の罫が入った400字詰め原稿用紙を何束か買ってきて、辞典や書物を引き比べながら、「あ」行から書き出したのですが、長くは続きませんでした。たしか「阿倍比羅夫」あたりで投げ出したように思います。今思い返して、大仰な言い方をいたしますと、知識の網羅性への志向が強かったのかもしれませんが。今の歴史家としての体質がそこに現れているようにも思います。それは分析的知ではなく、もっと素朴な蓄えるための知という在り様ですね。そんな感じがいたします。本題に戻りますが、中学のレベルであれば授業のときに集中さえしていれば、試験の勉強に時間を割かなくても学年ではいつも上位何番かに入ることができます。しかし高校になると、さすがにそうはいきません。また高校は汽車（電車ではありません）通学で、往復2時間はかかりました。そのため野球の練習が終わって帰宅するのはいつも8時か9時ごろという有様で、私にとっての「文武両道」はついに破綻しました。肝心の野球ですが、公立の地方進学校ですから、常勝というわけにはいきませんでした。それでも2年生の秋の新人戦では県代表として東北大会に出場し、東北高校相手に惜敗するくらいには強かったのです。そのとき対戦した東北高校の投手の一人が、後に大洋ホエールズ（現横浜ベイスターズ）に入団した及川宣士投手でした。球場で対峙したときは、その速球に度肝を抜かれたものでした。高校3年の時、夏の甲子園県予選の準々決勝で破れ、中学高校の5年半の野球生活に完全にピリオドを打ちました。

クリオ：大学進学はいつごろ意識しはじめたのでしょうか。

佐藤：予選の準々決勝で敗退して、さて大学だなと思って考えたとき、受験勉強にほとんど身を入れてないことに気がつき愕然としました。高校も野球漬けの2年半でしたから、クラスメートが皆志望校選びや、模擬試験に必死になっている姿がその時になってようやく視野に入ってきたのです。愚かというほかありません。私が中学生の時は、地方ということもあり、まだ受験競争を意識することはありませんでしたが、大学受験はそうではありませんでした。当時、国立大学を受験するためには、5科目か7科目か忘れましたが、非常に多くの受験科目が必要でした。9月から本格的に受験に取り組みましたが、半年弱で1年から3年までの勉強を一通りおさらいするには多すぎます。さりとて浪人生活はご免だという意識が強かった。そうになると、受験科目の少ない私立大学しかないと考えました。それじゃあどういう学部を選ぼうかとなったときに、はたと気がついたのです。私は将来について何も考えていないと。これが2つ目の霹靂で、なんともお恥ずかしい次第です。もうこの時点では、自分は家業を継がないだろうと漠然とっていました。それで友人とそんな悩みを話しているうちに、法学部がいちばん「潰しが効く」という話になりました。不真面目な話で怒られそうですが、それならとりあえず法学部にしよう。皆さんは多分知らないでしょうが、当時NHKテレビで放映していた『弁護士プレストン』という、ヒューマンな若い弁護士が主人公のアメリカのシリーズものがありました³。それを見ていて、弁護士という職業もなかなか面白そうだと思ったこともあります。それで私立で法学部という枠を作ったわけです。当時、司法試験の合格者数は東大が一番だったと思いますが、中央大学もそれに迫るぐらいの勢いでしたので、それでは中央大学にしようということで、4カ月ほど勉強しました。受験勉強といっても、当時の田舎に予備校のようなものはありませんから、1年生からの教科書を持ち出して、自学自習する以外に手立てはありません。もちろん問題集は見ましたけれども。私は今でもそうですが、基礎に対する執着があり、応用はその先に考えればよいという発想が強いのです。それはスポーツをやっていたせい

³ 『弁護士プレストン』（原題「The Defenders」）は、1962年から63年にかけて、NHK教育で日曜日午後7時30分から放映された。

かもしれません。つまり、まずは体を作らないとだめですから。私は投手だったのですが、初めのうちは投球をさせてもらえず、ひたすら走りこんで腰の反動力を、あるいは、投げはじめれば背筋力を鍛えるというような基礎的なことをさせられました。要するにスポコンのノリで勉強の枠組みを考えていたのでしょうね。

(2) 中央大学にて

クリオ：どのような気持ちで大学の門をくぐられたのでしょうか。

佐藤：幸いにして試験には合格し、1964年4月に中央大学法学部法律学科に入学しました。中央大学は、現在のように八王子ではなく、御茶ノ水に校舎がありました。皆さんはご存じないかもしれませんが、かつての中央大学の校舎は、中世の修道院のようにかなり広い中庭があり、そこをぐるりと回廊が廻らしてありました。その当時は、古びて少し暗い感じの建物だなと思ったのですが、西洋中世の修道院への思い入れもあるからでしょうか、いま思い返してみると、なかなか風情があったなと思います。これは余談ですが、大学というものはもともと教会組織の一つでしたし、オクスフォード大学など今でも修道院の雰囲気濃厚に満ちています。私はどちらかというところソルボンヌやロンドン大学のような都市型の大学に愛着がありますが…。入学式の当日だったと思いますが、式後に語学を基準にして編成されたクラスの担任の教師との顔合わせがありました。50人ほどのクラスだったのですが、その中に早くも憲法の教科書を読んでいる学生がいました。彼とは後で友人になったのですが、聞けば家業がうまくいかなくて父親が破産してしまったので、自分が弁護士になって家を再興しなければならないという境遇だったようです。入学式直後のまだ半分浮かれ気分の私には、またしても反省の材料です。周りには最初から彼のようにはっきりとした目的意識をもって入学している人も、それにひきかえ自分の選択がいかにか中途半端であるか、そのことにあらためて気づかされたのです。それで少し迷い始めたのですよ。迷い始めたというのは正しくないですね。初めからかりそめのものでしたから。父親は私が法学士になって戻ってくるのを期待していたこともあって、途中で自分の好みで専門を変え転部することは一切考えませんでした。私としては法学の卒業証書をもって家に帰るということが、なんとはいなしに父親との默契のように感じていたものですから。

クリオ：大学ではどのような講義を受講されていたのでしょうか。

佐藤：なにせ中学高校とスポーツばかりやっていたから、学ぶことに対する欲求は非常に強かったと思います。先ほど申しましたように、中央大学は当時御茶ノ水に校舎があったので、近場の東京大学の先生がたが数多く非常勤で教養科目を教えにきていました。生物学や地学のような理系の基礎的な教養も含めて非常に面白く、実は理系の学問をやってもいいなと思っていたこともあったほどです。社会学では、安保反対デモの折に亡くなった樺美智子さんのお父様樺俊雄先生から知識社会学の話に興味深く聞きました。それにフランス法の山口俊夫先生でしょうか。フランスで博士号を取得された偉い先生です。先生の授業は選択科目でしたがフランス法概論を講じておられました。講義ノートはフランス語で書かれていて、それをもとに日本語で講義されているのだという伝説めいた噂が受講生の間で流れていました。でも誰も見たものはいないので、正確なところはわかりませんが(笑)。そうした噂が流れるほどフランス語の凄さが伝わってきましたし、プリリアントな講義でした。当時山口先生は練馬の大泉学園に住んでおられたのですが、私も下宿が大泉学園でした。一度だけたまたま同じ電車に乗り合わせたことがあり、世間知らずの若者が自分から先生にご挨拶して、しばしお話をさせていただいたのは懐かしい思い出です。語学の授業にも身を入れましたね。今でも1年生の時のフランス語購読や英語購読のテキストを覚えています。当時の語学教育は、もっぱら文法とテキスト読解が中心で、外国語コミュニケーションにはさほど、というよりほとんど重きをおいていませんでした。フランス語のテキストの一つはシモーヌ・ド・ボーボワールの『無駄飯喰らい (La bouche inutile)』という百年戦争下のパリを舞台にした戯曲、英語はジョン・アップダイクの短編小説『ある医師の妻 (A Doctor's Wife)』や、おなじくアメリカの女流

作家キャサリン・アン・ポーターの短編小説などでした。その後、アン・ポーターの『愚者の船 (Ship of Fools)』をペンギン・ブックスで読みましたし、アップダイクのたとえばヘミングウェイとは対局的とも言える華麗な英語に魅了されて、翻訳が出るたびに買うほどの愛読者にまでなりました。そんなふうに考えると、私などは教養の授業のメリットを最大限享受したくちでしょうね。法学部の卒業資格が授業料を払っている親への約束みたいなものでしたから、期末試験前になると会社法や手形小切手法などの実務法にもわか勉強をしないといけない。一夜漬けというほどではありませんでしたが、試験に受かる程度のそれなりの勉強をしました。そうした専門の授業でとくに印象に残っているのは、民法の川村泰啓先生の講義です。民法を「商品交換法の体系」として再構成しようとした試みで、マルクス主義的な志向性がはっきりした内容でしたが、論理を追いかける筋道がエキサイティングな授業でした。司法試験を目指していた仲間にとってはあまりに非正統的な授業で、試験対策には役に立ちそうもないので敬遠されていましたが、社会科学の論理構成を実地で学んだような気がしました。

クリオ：どのようにしてヨーロッパの前近代世界への関心を持ちはじめたのでしょうか。

佐藤：法律の勉強もそれなりにしていたのですが、しだいに本当に自分のやりたいことをやろうという気持ちが強くなり、それでいろいろと模索していました。これは都心にある大学のメリットだと思いますが、大学の授業が休講になると、地裁とか高裁で開かれている裁判の傍聴によく行きました。現在では、趣味なのか本業かわからないほど裁判の傍聴にのめり込んでいる一部の若い人がいるようですが、私たちの場合は一応法律家の卵としての経験という意味があったと思います。その傍聴席に座っておりますと、人が裁かれるということはどういうことなのか、判決で人の命を奪うことが許される国家とはどのような仕組みをしているのか、その権力の根拠は何か等々、要するに国家というのは何かという問題関心を持たざるをえないですね。そこから、おそらく国制史とか国家史、そして、そうした近代国家の枠組みを最初に作ったヨーロッパの国家の起源についての興味が強く出てきたのだと思います。一方では、歴史学そのものにも関心があり、多少自分でも勉強をはじめていました。ただし私は法学部に属しておりましたので、特定の先生の指導を受けることはなく、自学自習でした。当時、よく利用したのは国立国会図書館です。大学の図書館もあったのですが、なんとにはなしにあそこの静かな雰囲気良かったのです。

クリオ：それで最初から国制史の研究をしようとする…

佐藤：当時の歴史学では、国制史も大きな流れとしてあったのですが、主流はやはり社会経済史でした。それで私も最初に目を留めたのは社会経済史でしたね。ただし当時の日本での動向というよりは、むしろヨーロッパの動向に関心を持っていました。

クリオ：なぜ日本ではなく、ヨーロッパの動向だったのでしょうか。

佐藤：そのきっかけは、やはり語学だったと思います。大学では第2外国語にフランス語を選択しましたが、これには人並み以上の熱意を傾けたと思います。近くのアテネ・フランセや飯田橋の日仏学院にも通いました。そういう形で、自分なりにフランス語に磨きをかけようとしたのです。とはいってもフランス語のよくできる人に比べれば幼いものでしたが、自分なりに努力をしたわけです。さきほど紹介したように、山口先生のようなフランス語の達人から受けた刺激も大きかったですね。

クリオ：なぜドイツ語ではなくフランス語に関心をもたれたのでしょうか。

佐藤：いわゆる文学少年とは違ってそれほど強いものではありませんが、中高時代には私なりの文学経験がありました。野球の日々を過ごしながらも、汽車通学ということもあって、非系統的に手当たり次第に乱読をしておりましたので、それなりの読書生活の素地はありました。そうした読書のなかでフランス小説をよく読んだということが1つですね。ただ文学は好きですが、やはり文学を専門に選んだら、愉しみではなくなるだろうという気持ちがあったので、学問としての文学は結局選択しませんでした…。もう1つは、当時全盛であったヌーヴェルバーグの映画が大きな要因

でしょうね。それではなぜ日本ではなくヨーロッパの歴史に強く惹かれたのか、という問いには簡単に答えられます。なんと言ってもヨーロッパ文明への憧れです。初めに申しましたが、生家の隣町の酒田には当時ソ連の船が頻繁に出入りしておりましたので、ロシア語を耳にし、船員たちを見かけることは珍しくありませんでした。また酒田にはアメリカの無線基地の一部のようなものが残っていて、彼らアメリカ人がつくる野球チームと練習試合をする機会も多かったのです。酒田など東北の一地方都市ですが、異国文化との接触という点ではむしろ中央よりも進んでいる面があったのです。そんなことも影響してヨーロッパ文明への関心が育まれたのでしょうか。海に陽が沈む日本海を見ながら、あの海の遙か向こうでは、これから一日が始まるのだなと、今にして思えば、奇妙に感情移入して日没光景を眺めるのが常だったのです。

クリオ：当時、専門的な文献を読まれる機会があったのでしょうか。

佐藤：学部の2、3年頃には、まだ翻訳のなかったマルク・ブロックの『貨幣史』を読んでいました⁴。あとは、クリストファー・ドーンソンの『ヨーロッパの形成』ですね。当時、野口啓祐先生の翻訳もあったはずなのですが、私はその存在を知らなかったのです⁵。たまたま神田の一誠堂の書棚に、香港の領事館図書室から放出された1冊が並んでいました。これが中世初期史、必ずしも厳密には初期史と言えないかもしれませんが、古代末期から中世の前半期にかけての時代を扱った、日本語以外で読んだはじめての書物です。書き込みをしたこの古書は、いまでも大事にとってあります。いま考えれば、この程度の読みしかできなかつたのかというような書き込みですけどね。しかし、神経質そうな20歳くらいの筆跡で書き込みがしてあって、それはそれで私にとっては貴重で懐かしい。

(3) 大学院時代

クリオ：それでは、大学院時代のお話をお聞かせいただけませんか。

佐藤：大学院に入るということは、研究者への道を進むはっきりとしたメルクマールになります。私は1968年に学部を卒業して、法学部出身にもかかわらず、東京大学文学部の西洋史学の大学院入学試験を受けました。いまでも入学試験の問題は覚えています。「紀元前5世紀から15世紀にかけてのバルカン半島の歴史を叙述しなさい」でした。問題が配布された時、明らかに東大の学部卒業生とおぼしき数人が、「えっ何だこれは」と大声をあげていたのが耳に残っています。「バルカン半島ってどこにあるんだ」と聞こえるくらいははっきり叫んだ人もいましたが、これはわざと言ったのでしょうか（笑）。当時の東京大学の西洋史学研究室は城戸毅先生が助手で、村川堅太郎先生、林健太郎先生、堀米庸三先生、柴田三千雄先生という錚々たる方々でした。林健太郎先生は、入試のときに胸に何かしるしをつけて壇上に立たれていましたので、入試委員長だったのかもしれませんが。受かったらいいなと思ったのですが、見事にすべりました。一年間浪人をしたのですが、私にはいろんな意味でちょっと無理じゃないかと考え、方向転換をして早稲田大学の大学院に入りました。1969年の4月です。早稲田ではもうお亡くなりになりましたが、鈴木成高先生のもとで勉強しました⁶。鈴木先生の思い出は沢山あっていくら時間があっても足りないくらいです。ということで、それはまた別に機会があればお話ししましょう。

⁴ マルク・ブロック（森本芳樹訳）『西欧中世の自然経済と貨幣経済』（創文社 1982）。

⁵ Christopher Dawson, *The Making of Europe: An Introduction to the History of European Unity*. London: Sheed & Ward 1932; C・ドーンソン（野口啓祐訳）『ヨーロッパの形成』（富山房 1944）；改訳新版として、C・ドーンソン（野口啓祐・草深武・熊倉庸介訳）『ヨーロッパの形成：ヨーロッパ統一史序説』（創文社 1988）。

⁶ 鈴木成高（1907-88）は、京都大学助教授を経て、早稲田大学教授となる。いわゆる京都学派の一人であり、中世史家としての代表作は『ヨーロッパの成立』（筑摩書房 1947）と『封建社会の研究』（弘文堂 1948）。

クリオ：大学院に行かれた時点で、すでに専門は決められていたのですか。

佐藤：はっきりと歴史家風に日時の特定ができればよいのですが、いつの時点で専門的な研究に進もうと思ったかと聞かれると、はっきりしないのです。だいたい皆さんもそうでしょう。当時の日本の状況を客観的に見れば、大学院に入った時点で、将来は大学のポストを得て、専門の職業的な歴史家になる以外にないわけですが、甘いところがあったのでしょうかね。専門がどうこうというよりも、とにかく勉強したいという気持ちが先に立っていました。

クリオ：先生は大学院に入られてすぐにカン大学に留学されていますね。

佐藤：大学院に入ってすぐの7月から、フランスのカン大学に私費留学しました。理由のひとつは、東大ほどではなかったのですが、早稲田大学も大学紛争で少し揺れていて、腰を据えて勉強するような雰囲気ではなかったということがあります。でも一番大きな理由は、皆さんが3年間あるいは4年間経験したような西洋史の教育を受けていなかったことですね。ですから、この際、フランスで初歩から西洋史の勉強をしようと考えて、親に借金をしてフランスに渡りました。あの時の借金はいまだに催促なしですが（笑）。

クリオ：なぜ、フランスの中でもカン大学だったのでしょうか。

佐藤：これはやはり中世初期に学問的関心があったということが根底にあります。たまたま、その前後の時期にフランス大学出版局から「Nouvelle Clio」という新しい叢書が出はじめて、そこにカン大学のリュシアン・ミュッセ（Lucien Musset）教授が執筆した民族移動期に関する2巻本が入ったのです⁷。それを読みまして、よくできる先生だなと生意気にも思ったのですね。それは、まだ専門家になっていない人間が読んでも、なんとはなしに大変な知識の持ち主であるという感じをうけた本でした。この読書経験がやはり大きかったです。私費の留学生ですから、自動的に物事が進むフランス政府奨学金とは違って、手続きをすべて自分でやらなければいけません。ビザも、フランスの大学とのはっきりした関係がなければ取得できませんので、ミュッセ先生にフランス語で手紙を書きました。「あなたのところで勉強したいのだが引き受けてくれるだろうか、もし引き受けるつもりがあれば、その旨の証明書をください」、と書いたらすぐに返事がきました。彼は丁寧にフランス文科省の外国人留学生用の登録予定番号（immatriculation）まで取得してくれたので、フランス大使館でなんの問題もなくビザが取れました。

クリオ：当時のカンはどのような状況だったのでしょうか。

佐藤：横浜から船でソ連を経由して、1969年の8月にパリに着いたのち、それ以前から友人だった芸大の彫刻家連中と、2週間くらいロワール地方などを旅行していました。カンに行ったのは、学期がそろそろ始まるころでした。その頃1968年パリを中心にした五月騒動の発火点は、実はカン大学だったという話を聞きました。カンにもあるのですが、アンドレ・マルローが企画してフランスの各地に建てた劇場の管理をめぐって異議申し立てがなされたのです。「二馬力」という意味の「ドゥ・シュヴオ（deux chevaux）」というフランスの車をご存知でしょうか。スクーターくらいの小さなエンジンに車体をつけたもので、ランニングコストも含め非常に安価なのですが、交通事故でぶつかったらひとたまりもありません。よほどのブルジョアの息子でない限り、学生で車を持っているとしたらこれでした。この車は天井がオープンにもなるので、そこに赤旗を立てて、何十台と連なってパリに入っていた、これが実は1968年の始まりだというのですが、真偽のほどはわかりません。

カン大学は百年戦争期にさかのぼる由緒のある大学ですが、ご存知のように1944年のノルマンディ上陸作戦で集中的に破壊され、大学も炎上しました。ですから図書館の蔵書というのは、一部を除けばいったんほとんどが灰燼に帰しているのです。私が借り出す専門書は、高等師範学校（Ecole Normale Supérieure）とか、なんとか大学の判子が押してあるものが多かったのですが、それは戦後、

⁷ Lucien Musset, *Les invasions: les vagues germaniques*. Paris: PUF 1965; Id., *Les invasions: le second assaut contre l'Europe chrétienne (VIIe-XIe siècles)*. Paris: PUF 1965.

各図書館で重複している書物をカン大学に寄付をして蔵書を増やした名残らしいのです。大学の前に立っていたフェニックスの像は、不死鳥のごとく戦後の荒廃のなかから立ち直ったことを意味しています。カンには戦後に新しく建設された最初の大学だったのではないのでしょうか。

カンではベトナムやカンボジア、イランなどから来た留学生と知り合いになりました。サイゴン陥落、カンボジア紛争、イラン革命の前です。彼ら、彼女らがその後どうなったか時折ふと胸をよぎることがありますが、知るすべがありません。

クリオ：大学ではどのような授業に出席されていたのでしょうか。

佐藤：私は人文学部部に所属していたのですが、歴史学には正教授が4人か5人いました。私は考古学の授業もかなり真面目に取りましたので、それと混同しているかもしれません。ただ、スタッフの名前ははっきりしておりまして、古代史がビザンツ学者のエヴリーヌ・パトラジャン (Evelyne Patlagean)、中世史がリュシアン・ミュッセ、それから近代史がピエール・ショニュ (Pierre Chaunu)、現代史は誰だったかちょっと記憶にありませんが、今考えると大変な教授陣です。中世史と言っても正教授にくわえて講師 (maitre de conference) がたくさんいますから、スタッフは随分充実していました。その当時、私はパトラジャンをそんなに偉い先生だとは思わず、彼女の授業には出ませんでした。その後、1984年にナンテールに留学したときは、彼女を指導教授のひとりとしてDEA課程に登録することになったのですが。

クリオ：具体的にどのような授業だったのでしょうか。たとえば、聴講する前に、先生から、次の時間までに自分の著書や論文を読んできなさいとかいう指示はあるのでしょうか。

佐藤：それは全然ありませんでした。当時、フランスの先生は、演習 (travaux dirigés) と講義 (cours magistraux) をもっていました。演習というのは、たとえば、トゥールのグレゴリウスを使って、メロヴィング時代のマンヌやヴィッラとは何かというようなことを学生に発表させる授業です。テキストはラテン語ではなく、フランス語訳ですが、講義は日本で言うところの特殊講義でした。パフォーマンスとして非常に面白かったのが、ショニュ先生です。私は彼の近代史とイベリア半島史の両方に出席していたのですが、彼はノートは一切持ってこない。それでは皆さん、クリストファ・コロンブスが大西洋をどのように横断したかをこれからお話ししましょうと言って、演劇的に音吐朗々と語るのですね。それで、いかに三角航法が画期的であったのか、操船術といった細かいディテールにいたるまで図を描いて話してくれました。その当時の研究水準ですから今では違っているのかもしれませんが、面白かったですね。そのノートは今でも持っています。

クリオ：ミュッセ教授はどのような授業をされていたのでしょうか。

佐藤：ミュッセ先生はノルマンディ大公領の話をしていたのかな。彼は親切な方でしたが、非常に気難しい方でしたね、なかなか私ほうまく付き合えませんでした。それはフランスの学生も同じような感じでしたね。皆さん、彼が20歳前後に書いたノルマンディ地方の古典荘園制についての長い論文を読んだことがありますか⁸。その年であれだけの水準の作品を書くというのは大変な才能です。私は非常に優秀で素晴らしい歴史家をたくさん知っていますが、ミュッセ先生の書いたものは、短いものも含めて外れはありません。彼の終生のテーマはノルマンディ大公領の成立でしたが、結局それは学位論文というまとまった形では完成しませんでした。誰もが異口同音に言うのですが、あれだけの完璧主義者だったらそもそも完成の見込みはなかった、というほどの完璧主義者でした。あの先生は発掘もやっていたのですが、彼の発掘作業場 (chantier) は、彼が完璧主義者なものだから、みんな手伝おうにもなかなか折り合いがつかなくて難しかった、と言われていました。そういうカン大学での勉強が、私の専門家としての土台になるのでしょうか。ですから、学部時代に多少日本の職業的な歴史家たちの仕事を読んで、それは確かに非常に為になりましたが、結局、私は日本

⁸ Lucien Musset, Notes pour servir d'introduction à l'histoire foncière de la Normandie. Les domaines de l'époque franque et les destinées du régime domanial du IXe au XIe siècle, in: *Bulletin de la Société des Antiquaires de Normandie* 49 (1942-1946), p. 7-97.

の学会の研究の動向からは出発しなかったのですね。どちらかというとならフランスの学問の流れや研究の仕方から出発したところがあります。それが私にとって良かったのか悪かったのかわかりませんが、事実としてそうだったということです。結局、丸2年はいなくて、1年半で帰国しました。

クリオ：そのままフランスで学位を取得しようとは考えなかったのでしょうか。

佐藤：その当時は、私自身夢にも思いませんでした。先ほど申しましたように、私は皆さんが学部時代に受ける歴史家としての教育を受けておりませんでしたので、それをフランスで遅まきながら追体験することで十分だったという気がしています。5、6年いればフランス語で書けたかもしれませんが、それだけの金銭的な余裕も、フランスで生活の糧を稼ぐだけの手立てでもありませんでしたし、何よりも時間的に惜しいと思っていました。

(4) 修士論文

クリオ：先生は早稲田大学に修士論文を提出されていますが、これがはじめての実証研究となります。この点についてお話をお聞かせいただけないでしょうか。

佐藤：早稲田大学の大学院の1年目に休学して、夏休みに入ってすぐにカン大学に参りましたので、単位はまったく取得していませんでした。ですから初めから修士課程をやり直し、修士論文として、カール大帝治下のセプティマニア・スペイン辺境領についての研究を仕上げました。

クリオ：なぜ、カロリング帝国の南を対象としたのでしょうか。

佐藤：どうして南だったかな(笑)。実は、修士論文の下敷きとなる調査そのものはフランスでやっていたのですよ。カン時代にそういう文献はたくさんありましたので、ジョセフ・カルメット『中世におけるピレネー問題とスペイン辺境領』やレオンス・オジラス『カロリング期アキテーヌ』といった書物を、全部ノートを取って読んでいました⁹。これもまだノートが残っていると思います。それで、修士論文のテーマをいくつか考えた中に、オルレアン伯マトフリドゥスについてのモノグラフィを書くというのが入っていました。

クリオ：なぜ、マトフリドゥスという、言ってみればマイナーな人物に興味をもたれたのでしょうか。

佐藤：それはたぶんレオンス・オジラスの書物を読んだからだだと思います。カロリング帝国が崩壊するきっかけになる、ヒスパニア遠征軍遅滞事件というのがあります。どういうことかと申しますと、カール大帝の死後、ロテール王と東フランクのルートヴィヒ・ドイツ王が手を結び、西フランクのルイ敬虔帝に反旗を翻すことになったわけですが、その契機を求めて歴史の脈絡をさかのぼると、ヒスパニア遠征遅滞事件で政治的な亀裂が生じていた、と理解していたのだと思います。そして、その事件の原因となったのがトゥール伯フーゴーとオルレアン伯マトフリドゥスなのですが、私には、マトフリドゥスという名前が珍しかったので、関心を持ったのでしょうか。その後、フィリップ・ドゥプレュー(Philippe Depreux)もマトフリドゥスについてモノグラフィを書いてますね¹⁰。

クリオ：そういったあたりに修士論文のテーマの淵源があるのですね。

佐藤：結局はフランク帝国の解体期ではなく形成期を扱うことになったのですが、こうした政治史的な文脈がフランク帝国の南の問題を取り上げた理由の1つです。それからもう1つあります。これは忘れもしませんが、大学院に入る前の浪人時代に、創文社から『中世の自由と国家』という、例の国王自由人学説を検証した仕事が発行されました。私はこれに絶大な影響を受けているのですが、その上巻と中巻に収録された、皆さんの先輩である直居淳先生が書かれた「国王自由人とは何か」と「八・九世紀のアレマニエン」という2つの論文を読んで、非常に感激をしました¹¹。カピトゥラ

⁹ Joseph Calmette, *La question des Pyrénées et la Marche d'Espagne au moyen âge*. Paris: J. B. Janin 1947; Leonce Auzias, *L'Aquitaine carolingienne*. Paris: H. Didier 1937.

¹⁰ Philippe Depreux, Le comte Matfrid d'Orléans (avant 815-836), in: *Bibliothèque de l'Ecole des Chartes* 152 (1994), p. 331-74.

¹¹ 直居淳「国王自由人とは何か カロリナー時代の史的所見から」久保正幡編『中世の自由と国

リアを用いた研究ですが、そこで国王自由人学説の根拠の1つになっているのがヒスパニア植民者でした。このヒスパニア植民者については、アンドレ・デュポンが『Annales du Midi』やナルボンヌの地方雑誌等に2、3本書いていたのですが、直居先生がしたような、カピトゥラリアを利用した体系的な研究という感じではありませんでした¹²。その後、東ドイツのエックハルト・ミュラー＝メルテンスが、やはりこのヒスパニア植民者を取り上げて論じています¹³。彼は国王自由人学説を基本的には批判するスタンスをとっていたはずですが、日本ではその紹介を岩野英夫さんが行っています¹⁴。その後、どういう経緯だったか忘れましたが、直居先生の所属等について聞こうと創文社に電話をしたら、直居先生は亡くなられたという話を編集部から伺いました¹⁵。驚くと同時に、悲しい気持ちになりました。

クリオ：修士論文につながる道は、2つあったということですね。

佐藤：そうですね。南フランスの中世初期を取り上げた背景には、一方でカロリング時代の政治史の脈絡、他方で国制史の国王自由人学説の脈絡という、2つの筋があったということになります。この2つの筋をひとつにして、修士論文を書こうと考えたのです。うまく成功したかどうかわかりませんが、とにかくそうした形で仕上げました。国王自由人学説に関する部分は、私が初めて就職した愛知大学の紀要に、2回に分けて書きました¹⁶。それは論文集の中にも入れています¹⁷。この修士論文の延長で、そのまま南フランスをやりつづけるという選択肢はもちろんあったと思いますが、当時はその先の展望が学問的によく見えていませんでした。博士課程に進んだ当初は、カロリング国家の成立といったテーマを考えていましたが、徐々にメロヴィング時代にさかのぼっていききました。時間をさかのぼるといえるのは悪い癖ですね（笑）。

(5) パリでの2年間

クリオ：先生は大学院を終えて愛知大学の法経学部にて御就職後、再度フランスに留学、と言いますか在外研修に行かれています。その時のお話をお聞かせいただけますか。

佐藤：1984年から86年にかけての2年間、パリ第10学ナンテール校に在籍していました。これは勤務先の大学に行かせていただいたのですが、最初の留学との最も大きな違いは、滞在先がパリだったということです。事務処理の都合上、ピエール・リシェ（Pierre Riché）教授を受け入れ教官と

家 西洋中世前期国制史の基礎的問題（上）』（創文社 1963）、259-402頁；同「八・九世紀のアレマニエン」久保正幡編『中世の自由と国家 西洋中世前期国制史の基礎的問題（中）』（創文社 1964）、81-201頁。

¹² André Dupont, Quelques aspects de la vie rurale en Septimanie carolingienne, in: *Annales de l'Institut d'études occitanes* (1954), p. 11-29; Id., Considérations sur la colonisation et la vie rurale dans le Roussillon et la Marche d'Espagne au IXe siècle, in: *Annales du Midi* 67 (1955), p. 223-45; Id., L'aprision et le régime aprisionnaire dans le Midi de la France (IXe-Xe siècle), in: *Le Moyne Age* 71 (1965), p. 179-213.

¹³ Eckhard Müller-Mertens, *Karl der Große, Ludwig der Fromme und die Freien: Wer waren die liberi homines der karolingischen Kapitularien (742/743-832)? Ein Beitrag zur Sozialgeschichte und Sozialpolitik des Frankenreiches*. Berlin: Akademie Verlag 1963.

¹⁴ 岩野英夫「Aprisionäre考 E・ミュラー＝メルテンスの諸説の紹介」『同志社法学』第25巻4号（1974）、89-104頁。

¹⁵ 1933年生まれの直居淳は、東京大学法学部助手、東京大学文学部助手を経て、北海道大学助教授を歴任したが、1967年11月に急逝した。研究業績としては、註11にあげた2本の長尺の論考に加えて、直居淳「カール4世『黄金印勅書』に就いて（1）（2）」『史学雑誌』第65編第4号（1956）、1-20頁、ならびに第6号（1956）、26-55頁、久保正幡・石川武・直居淳訳『ザクセンシュピーゲル・ラント法』（創文社 1977）がある。

¹⁶ 佐藤彰一「八・九世紀セプティマニア・スペイン辺境領のヒスパニア人をめぐる国制・社会状況（一）（二完）」『愛知大学法経論集（法律編）』第92号（1980）、1-35頁 & 第94号（1980）、45-79頁。

¹⁷ 佐藤彰一「八・九世紀セプティマニア・スペイン辺境領のヒスパニア人」佐藤彰一『中世初期フランス地域史の研究』（岩波書店 2004）、305-65頁。

して DEA 課程に登録しましたが、自分の研究をやっていました。ちなみに私の DEA 審査委員は、主査がリシェ先生、それにパトラジャン先生、フィリップ・コンタミーヌ (Philippe Contamine) 先生、アンドレ・ヴォシェ (André Vauchez) 先生が加わった、大変豪華な布陣でした。これは私だけではなく、中世をテーマにした誰もがそうだったのです。当時のナンテールの中世史のスタッフの充実ぶりがうかがえるでしょう。

クリオ：ゼミのようなものには出席されていたのでしょうか。

佐藤：週に一度だけリシェ先生のセミナーがありまして、彼のほかに古代貨幣史のジャン＝ピエール・カリュ (Jean-Pierre Callu) 教授、ドミニク・イオニャ＝プラ (Dominique Iogna-Prat) さん、ギイ・ロブリッション (Guy Lobrichon) さん、そして私の 5 人が参加者でした。セミナーといっても私をのぞけば、第一級の専門家だけの研究会と言った方が正確でしょう。まだ校訂版が出る前のジェルベール・ドーリヤックの書簡を読んでいました¹⁸。中心はリシェ先生ですが、ラテン語を片っ端からフランス語に訳していたのはカリュさんで、これは得難い経験でした。一流の古典学者の力量をつぶさに見聞する機会を与えられたわけですから。カリュ教授はまずは自分でラテン語を音吐朗々と読み上げるわけです。このセミナーで、私はフランス人のラテン語の発音の仕方を学びました。日本では母音の長短を極端に誇張しますが、フランスではその長短が微かにわかるかどうかという程度です。私は国際学会でラテン語の原文は可能な限り引用しませんが、仕方なく引用するときは、なんかニヤニヤされているような感じがして気恥ずかしい。それで長くは引用しないようにしています (笑)。それでも、このセミナーに出たことで、多少コツはつかめたように思います。それでカリュさんはテキストを読みあげたあとに、即座にフランス語に訳していくのですよ。試訳なんて作っていません。こここのところはこの単語じゃないほういいかなとか、これは誰々からの引用だとか、自問自答しているわけです。その思考過程を全部口に出して言うのですね。優れた古典学者の実力の凄さを痛感させられる、学ぶ者にとってはかけがえのない貴重な時間でした。このセミナーは、週末金曜日の午後 5 時から 7 時過ぎまでの 2 時間開かれていました。終わると皆でナンテールからパリ高速鉄道 (R. E. R.) に乗って、三々五々、パリ市内の自分の最寄り駅から帰宅したのですが、その車中の学問、非学問を取り混ぜての会話は楽しかったですね。

クリオ：リシェ教授のセミナーで何か記憶に残ったことはありますか。

佐藤：ひとつ今でも覚えていることがあります。何か封建制に関わる単語の解釈に関して、カリュさんが一度、「君のほうが正しい」と言ってくれたことがあります。たった一度だけですが、私としては大変嬉しいことでした。彼らの仲間に入れてもらったという経験は、私にとってかけがえのない財産です。

クリオ：他には…

佐藤：もう 1 つ、高等研究院 (Ecole pratique des Hautes Etudes) で開かれていた、ピエール・トゥベール (Pierre Toubert) 教授のセミナーに参加させてもらったことです。私は最初にパリについた時、リシェ先生にすすめられて、パリ第 1 大学のロベール・フォシエ (Robert Fossier) 教授のところへ挨拶に行きました。彼は私の研究テーマを聞いて、それだったらというので、トゥベールさんを紹介してくれたのです。フォシエさんは当時、パリ大学の学部長を務めていました。トゥベールさんは同じパリ第 1 大学の教授でしたが、同時に高等研究院のディレクター (Directeur) でもありました。彼は高等師範学校を出たノルマリアンですが、彼らノルマリアンはおおむねキュムレ (cumulé)、つまり 2 つのポストを兼職します。トゥベールさんの後任であるドミニク・バルテルミイ (Dominique Barthélemy) 教授もノルマリアンですが、やはりパリ第 4 大学と高等研究院の両方にポストを持っています。彼らにはそれだけの能力がありますので。

¹⁸ Pierre Riché & Jean-Pierre Callu (éd.), *Gerbert d'Aurillac, Correspondance*. 2 tom. Paris: Les Belles Lettres 1993.

クリオ：トゥベール・セミナーはどのような様子だったのでしょうか。

佐藤：セミナーは隔週で木曜日の午前10時から2時間連続の授業でしたが、独特の雰囲気がありました。この部屋と同じく、さほど大きくはない部屋の真ん中に巨大なモナスティック・テーブルが置かれているのですが、そのテーブルにノートを置いてメモを取ることができる特権的な人々は、だいたい助手から講師クラスでした。残りの大学院生はすべて壁の花です。私も机に座らせてもらいましたが、一番の論客がドミニク・バルテルミイ、一番の古株がジャン＝マリ・マルタン（Jean-Marie Martin）、そしてミシェル・ジンメルマン（Michel Zimmermann）、いまやフランスを代表する地図史料の専門家パトリック・ゴーチエ＝ダルシェ（Patrick Gautier-Dalché）、もう亡くなりましたが、時折ジャン＝シャルル・ピカル（Jean-Charles Picard）、それからジャン・ドリュモ（Jean Delumeau）の御息子でジャン＝ピエール・ドリュモ（Jean-Pierre Delumeau）、パドヴァに関する学位論文を完成した直後に急逝したジェラルド・リップ（Gérard Rippe）などでしょうか。私が帰国する数ヶ月前は、フランソワ・ブガル（François Bougard）も参加していました。要するに、高等師範学校もしくはその周辺の出身の若手有望株がみんな集まっていた。ジャック・ダララン（Jacques Dalarun）君もトゥベール先生のお弟子さんですが、このゼミには出席していなかったですね。

クリオ：セミナーではどのようなことが議論されていたのでしょうか。

佐藤：各自が準備している国家博士号取得論文の進行具合を、具体的なトピックを取り上げて、しかも——ここが大事なところですが——史料分析を通して紹介する形式でした。授業のタイトルが「イタリア中世史」ですから、もっぱらイタリア史の専門家が報告していました。ジンメルマンさんはスペイン史ですが、地中海地方ということで2度ほど発表を聞いた記憶があります。バルテルミイ君はフランス史なので、もっぱら討議要員でした。トゥベール先生が何かの機会に私に言ったことが印象に残っています。それはフランス史を専門にしている歴史家とイタリア史の専門家との違いです。「私は外国史の専門家であるという点で、フランス史をやっている歴史家にたいしてハンディを負っている。まず言葉の面で、それから風俗習慣についての知識の面で等々。それは日本人でありながらフランスを研究している君たちとおなじだ」と先生は言うのです。これには少々驚きました。確かに言われればその通りに違いないのですが、それでもわれわれの目から見れば、中世フランスと中世イタリアの差異など、日本中世とフランス中世の違いに比べれば些細としか思われぬですからね。しかし実はフランスの歴史家世界では、われわれ日本人には窺い知れないところで、大事な差異として働くのかもしれない。脱線してしまいましたが、トゥベール・セミナーでは年齢が先生に近いマルタンさんが、いわば師範代格で報告についてフランス以外の研究動向を引き合いに出しながらコメントを加えていました。場合によってはバルテルミイ君が口火を切ることもありました。議論は実証的な細部はともかく、しばしば中世社会経済史の大きなトピック、例えば領主制的賦課や古典荘園制などに関係していて、私たち日本人にも参加しやすいものでした。この時議論にくわわるのは、国家博士号を目指している一人前の研究者たちで、壁に背をつけて遠巻きにしてノートを取っている大学院生諸君は、議論の水準に気後れして発言もままならない印象でした。それでいいのだらうと思いますが、最後にトゥベール先生が、必ず何かウィットに富んだ表現で議論を総括するという感じでした。

クリオ：研究以外の交流というものもあったのでしょうか。

佐藤：トゥベールさんはノルマリアン時代にほんの一時期フランス共産党に入っていたことがあるので、マルクス主義の思考法に馴染んだ人です。これは2005年2月18日付けの『ル・モンド』紙のニコラ・オフエンスタット（Nicolas Offenstadt）とのインタビュー記事で、ご自分で認めています¹⁹。そうしたことも影響しているのでしょうか、マルクス主義歴史学をくぐり抜けてきた日本の戦後歴史学の肌合いに合う思考をする人です。学問もそうですが、雑談が実に面白い。フランス人

¹⁹ Conversation: Le Moyen Age total de Pierre Toubert, in: *Le Monde*, Vendredi 18 février 2005.

の先生はあまり雑談をしないのですが、彼の場合はみんなが許容するような知的雑談です。先ほども申しましたようにセミナーは木曜の午前に2コマ連続でやりましたが、それが終わるとセミナー参加者のうち、主だった者が議論しながら自然にパンテオンに近い一画にある「天下楽園」という中華料理屋に流れて行きます。なんというか、トゥベール一家という感じですね。料理はそれぞれ好きな品物を頼むのですが、勘定となると、食べた品物の値段の高低を全く考慮しない頭割りになります。トゥベール先生は、「私はクリプトセミネール（非公式の研究会）は嫌いだ」と言って、その場では学問の話は一切しません。隔週でしたが、コンヴィヴィアルな楽しい会でしたね。そこでの若い連中との付き合いは、いまでも私にとって重要な結びつきとなっています。とりわけバルテルミ君とか、プガール君とかね。

クリオ：先生と食事をする機会というのは、フランスではどのくらいあるのでしょうか。

佐藤：トゥベールさんのような例を私は他に知りません。普通フランス人は、院生であっても、あるいは助手クラスでも、セミナーが終わった後に先生といっしょに食事をすることはありません。リシェ先生も一切しませんでした。授業や演習の流れで先生と食事をするのはトゥベール先生独特の作法と思いますが、正式の招待での食事は割と頻繁ですね。そしてそれは学者のつきあいとしてかなり重要な要素だろうと思います。学生の身分ではそうはいかないかもしれませんが、大学でポストを得た後の留学の際は、基本的に大学教師同士という対等な関係のつきあいになりますから、招待されたら頃合いを見て今度はこちらが招待しなければなりません。招く招かれるの加減は、交流の面でおそろかにできない要素です。招待は基本的に夫婦単位なので、夫婦揃っての滞在が理想的ですが、それがままならなければ単独でのレストランへの招待という便法もあります。そういう時は、2人分喋らなければなりませんし、話題も適宜硬軟取り混ぜないといけないから、しんどいところがありますよ。

クリオ：パリ滞在中、具体的にどのような研究をされていたのでしょうか。

佐藤：2年間の滞在中はセミナーで1度発表させられたくらいで、あまり大学世界のなかでの発表はしませんでした。それでこの時期に何をやっていたかと申しますと、森本芳樹先生たちとの研究会でまとめた都市農村関係の論集の下調べがひとつ²⁰、そして後に『修道院と農民』という学位論文に結実する研究の準備でした。『修道院と農民』については、後ほどお話いたします。

2. 研究者として

(6) 中世史学の意義

クリオ：先生は職業的中世史家として数多くの研究を発表されていますが、中世史学という学問分野にはどのような意義があるとお考えでしょうか。

佐藤：特に中世史が他の時代に比べて学問的に特権的な意味合いがあるという考え方を、かつて私も書いたことがあります。そのような直接的な表現をしているわけではありませんが、『西洋中世史研究入門』の序文で、歴史を川の流れにたとえて、「中世は古代という川上と近代という川下を同時に捕捉できるメリットがある」と申しました²¹。しかし最近、はたしてそうなのか、と考えるようになってきました。

クリオ：先生の中で、以前とは中世の捉え方が変わってきたということでしょうか。

²⁰ 佐藤彰一「7世紀後半ルーアン司教区における修道院建設・定住・流通—聖人伝を主たる素材として—」森本芳樹編『西欧中世における都市＝農村関係の研究』（九州大学出版会 1988）、1-49頁（改稿の上、「7世紀ルーアン司教区における修道院建設・定住・流通—聖人伝を主たる素材として—」として、佐藤彰一『中世初期フランス地域史の研究』（岩波書店 2004）、229-82頁に収録）。

²¹ 佐藤彰一・池上俊一・高山博編『西洋中世史研究入門』（名古屋大学出版会 2000）、iv頁。

佐藤：そうですね。歴史認識論の根幹に関わるのですが、そもそも歴史を川の流れのようにとらえることにやや懐疑的となっているのです。これには私どもの COE プロジェクトの影響もあるのですが、歴史というのはある種の構築されたものであるという考えが今の認識の根底にあります。これはポール・ヴェーヌ (Paul Veyne) の『差異の目録』もそうですし、多くの論者たちが同じようなことを言っております²²。とりわけ現象学の影響が強くなっている現在の歴史家の多くは、歴史は物語であるという認識を持っているのではないのでしょうか。もちろん私は、歴史が物語であるからといって、それが非科学的であるとは決して考えていません。ただ、歴史はやはりある種のストーリーであるという認識は踏まえておいたほうがよいと思っています。

クリオ：もう少し具体的に説明いただけますか。

佐藤：たとえば、古典期には歴史を古代、中世、近代という3つに区分します。ルネサンス人たる自分たちは近代であり、古典古代とは違う時代に生きているという認識、それが古代と近代をまず準備し、しかる後に、その2つの時代の中間の時期として中世を作り上げることで、区分ができあがるわけです。後の時代になると、そこに近世が入ったり現代が入ったりして、区分法が変わってきますが。どんな現象にも見られることで、科学的な根拠があるわけではないのですが、3つに分けるとシンメトリカルでバランスが取れますよね。そういう点を考えると、歴史の三区分とは、ある種の美学的な感性の為せる業であって、なんら必然性があるものではないと考えることができます。ですから、その真ん中の時代に過ぎない中世に、歴史の全体のパースペクティブを捉えるための特権的な視点を与えるのは、厳密に言えば難しいのではないかと考えます。

クリオ：時代区分が擬制上のものであるということはわかりますが、その上で中世という時代区分に意味を与えることはできるでしょうか。

佐藤：仮に、古典的な三区分を用いた場合のメリットは何かというと、やはり現実の歴史のプロセスを明確に捉えることができる、ということでしょう。これは私がたまたま他の地域の歴史に比して、日本とヨーロッパの歴史について知っているという知識のしからしめる問題なのかもしれませんが、ヨーロッパの歴史と日本の歴史の動きに最も明瞭にあらわれているように思えます。なぜかと申しますと、ヨーロッパと日本の歴史の展開は非常に分節化 (articulate) されているからです。つまり、時代区分で言うと古代とか近代、あるいは奴隷制とか封建制とかいうように、ある時代から次の時代に移っていくその動きの区切りが、他の地域の歴史に比べて非常にはっきりしている。私にはそんなふうに思えるわけです。ですから、他の地域においてもそんなのかもしれませんが、わかりやすいのはヨーロッパの歴史なわけです。

クリオ：そのように歴史の流れを分節化して捉えた場合、中世はどのような位置にあるのでしょうか。

佐藤：今述べたことを踏まえたうえで、その真ん中の時代がどういう意味があるのかということを経ヨーロッパの歴史に即してみたとき、中世というのは約一千年間にわたって、ある種の世界が形成される状況が続くわけです。同じヨーロッパといっても、西ヨーロッパの場合は5、6世紀くらいから中世世界の生成がはじまりますが、たとえば、東ヨーロッパとかスカンジナビアの場合、西ヨーロッパと同じような段階に達するまでに相当のタイムラグがあります。つまり、私のような国制史的な発想からすると、ヨーロッパを、北ヨーロッパ、西ヨーロッパ、東ヨーロッパ全てを含めたヨーロッパ半島と理解し、その半島の歴史に中世という枠組みを設定した場合、その中世とは、以前の時代が残した遺制から、ある歴史的な現象が明確な形をとって作り出される時期である、ということになります。したがって、中世はそれ以外の時代に比べて、社会が組織されていく側面を明瞭に読み取ることでできる時期であるということが、中世史にたずさわる者にとって最大の特権的視点ではないかと思えます。これはあくまで私自身の研究関心にひきつけた解釈であって、それ以外の視点もあります。たとえば中世後期の宗教運動のような現象も興味深いですね。もちろん、今述べたことが客観的に中世史のメリットかどうかと問われれば、それは絶対にそうだ、私以外の

²² ポール・ヴェーヌ (大津真作訳) 『差異の目録 新しい歴史のために』 (法政大学出版局 1983)。

人もそうでなければならない、と言うつもりはありません。ただ、私の専攻するフランク史というのは、それが、中世以前のヨーロッパ最大の政治構成体である西ローマ帝国が解体する過程のなかで出てきた、歴史的な創造物であるという点を勘案すれば、中世世界を理解する上で何物にも替え難い研究対象になるのではないかと思います。

クリオ：フランク帝国は、ヨーロッパ世界の生成過程を測りうるゾンデ（測深器）のようなものであるということですね。

佐藤：もう1つ似たようなことになりましたが、今述べたことを少し観点をずらしてこのように考えることができるような気がします。中世という時代は長く続いてきたある時代の終わりに位置している。そのある時代とは、ヨーロッパ半島への東ユーラシア地方からの諸民族の流入がひきも切らず続いた数千年という、長いタイムスパンを持った時代です。古代ユーラシア史の大家フランツ・アルトハイム (Franz Altheim) にとって、ローマ帝国の隆盛でさえ、そうした数千年続いてきたヨーロッパ半島の歴史の定番になっていた外民族の還流的侵略の合間の休止期に生まれた挿話でしかないのです²³。4、5世紀のゲルマン民族移動は必ずしも東から西への移動ではありませんが、彼らが移動の前に得ていた本来のポジションでさえ、多くはそれ以前の移動の成果であったに違いありません。ゲルマン民族移動期以後もアヴァール人、マジャール人、モンゴル人、オスマン・トルコ人と、ヨーロッパの入口にあたるカスピ海北岸の草原地帯が静まることはありませんでした。その最後を画したのが15世紀のオスマン・トルコ人であり、それ以後ヨーロッパはこの種の外民族が大挙して押し掛けるような侵略を経験していません。つまり諸民族の回廊地帯としてのヨーロッパ史に終止符が打たれたのです。先ほど申しましたように、中世がヨーロッパ社会の固有な諸側面の創成の時代であるとの考えは、そうしたマクロなヨーロッパ史の捉え方からも言えることでしょう。それ以後ヨーロッパは明確な空間的枠組を獲得し、内部的な経済的文化的征服による構造化を進めていくことになります。マクロに見ればそれが近代ヨーロッパの歴史的特徴でしょう。したがって、中世が古い「ユーラシア史」としてのヨーロッパ史の構造の最後の局面であり、同時に固有のヨーロッパ史の最初の局面であるというのは、そうした意味においてと言えるでしょう。

(7) フララン研究集会 (1988) にて

クリオ：佐藤先生は1988年9月10日、フランスのアルマニャックにあるフララン修道院で開かれた研究集会に参加され、口頭発表をされています。この発表は、ヨーロッパの学界に先生ご自身の実証研究の成果を問うという意味では初めての機会になったと思うのですが、この集会のことをお話いただけないでしょうか。

佐藤：少し長くなりますが、経緯からお話しましょう。先ほど申しましたように、1984年夏から86年夏にかけて、パリで家族と一緒に研究生活を送る幸せな経験をしたのですが、その折に書き上げたDEA論文「メロヴィング末期における、トゥールのサン・マルタン修道院会計文書に関する研究 Recherches sur les Documents Comptables de Saint-Martin de Tours à la fin de l'époque mérovingienne (1985)」を当時トゥルーズ大学の教授であったピエール・ボナッシィ (Pierre Bonnassie) 先生に送ったところ、すぐに御礼の返事が来て、ついでには88年9月に中世に開催されるフララン研究集会で短い報告をしてくれないかという申し出が添えられていました。フララン国際研究集会は、1979年にボルドー大学のシャルル・イグネ (Charles Higounet) 教授が南西フランスのジェルズ県観光協会の全面的な支援を受けて、旧シトー派修道院フラランを会場に毎年9月に開催している学術研究集会です。私は1984年から86年の滞在中に参加する機会を持たなかったのですが、有名なイタリアのスポレート研究集会のようなものをフランスに作ることを意図して発足したようです。1988年は発足からちょうど10年の節目にあたり、「中世初期の農業成長」というテーマで記念大会を行なうことが決まっていた。ところがこの年の4月にイグネ先生が急死されたため、急遽追悼研

²³ フランツ・アルトハイム「西方古代末期の問題性 (1) (2)」『古代学』第3巻4号 (1954)、356-65頁と同第4巻1号 (1955)、3-16頁。

究集会という趣になりました。私とイグネ先生の縁は、ソルボンヌの高等研究院の薄暗い廊下で一度誰かに紹介されてほんの短い立ち話をしただけですが、その温厚で謙虚な人柄に強い印象を受けていました。先生のそういう人柄もあってか、フララン研究集会には中世初期社会経済史の主だった顔ぶれが揃い、賑やかな追悼の集りとなりました。何人かの名前を挙げましょう。まず組織委員長を務めたピエール・ボナシエ、そしてジョルジュ・デュビイ (Georges Duby)、ピエール・トゥベール、ロベール・フォシエ、アドリアーン・フェルヒュルスト (Adriaan Verhulst)、ギイ・ボワ (Guy Bois)、ディートリヒ・ロールマン (Dietrich Lohrmann)、ジャン＝ピエール・ドヴロワ (Jean-Pierre Devereoy)、モニク・ブーラン (Monique Bourin) といった人たちです。

クリオ：具体的にはどのような内容を発表されたのでしょうか。

佐藤：私はここで、『シャペル・オード修道院カルチュレール』に断片の形で収録されている 627 年 5 月 20 日のテオデトゥルードの寄進文書を材料にして²⁴、古典荘園型所領の形成過程について再検討を加える手がかりを掴もうとしました²⁵。古典荘園型所領が、領主直営地と農民保有地という 2 つの要素から構成されているのはよく知られています。通説では、領主直営地が解体もしくは変容する過程で農民保有地が形成されるとされます。というのも、このタイプの荘園の歴史的出発点は奴隷を主要な労働力とした古代の所領であり、したがって論理必然的に領主直営地が農民保有地にクロノロジカルに先行することになるからです。しかしテオデトゥルードの文書と、これに関連する史料の所見を総合すると、どうもそこでは直営地が時間的に後から構成されたと解釈しうるふしがあるのです。仮にそうだとすると、その帰結はかなり重大な意味をもちます。1 つは古典荘園制の歴史的系譜を古代奴隷制の解体の帰結として捉えるための理論的根拠が失われるということ、もう 1 つはこれと関連して、中世初期の奴隷は古代の奴隷との歴史的系譜を持たない存在であるということです。いずれにせよこの問題提起は、依然開かれたままになっている問いかけであり、機会を得て更に掘り下げてみたいと思っています。

クリオ：登壇された時、どのような心境だったのでしょうか。

佐藤：報告前はさすがに緊張しました。壇上に登って見渡すと、先に名前を挙げた綺羅星のような面々が第 1 列目に仲良く横並びに座り、鋭い眼光で笑顔の片鱗さえ見せず私が報告を始めるのを待っています。それを見たとき、どういふわけか不思議に気持ちが落ち着きました。それでまず喉を湿らそうと、水差しからコップに水を注いだのですが、手がまったく震えていないのに気がつきました。昔培ったマウンドでの経験があるいは幸いしたのかもしれませんが。無事報告を終えると、トゥベール先生は、「君もついにヨーロッパ学界にデビューしたね」と労ってくれました。その後の総合討論は、中世初期における経済を極めて低く見積もるロベール・フォシエ教授が、「中世初期の農業成長」というこの研究集会のテーマ自体が自説への挑戦である」と宣言したこともあり、異様な緊張が会場に漲りました。研究集会報告集の質疑採録を見ていただければおわかりかと思いますが、フランスの中世関係の学会にしては著しく理論的側面を重視した議論であったことが印象的でした。

集会の翌日に、この組織の資金面のパトロンの一入らしいアルマニャックを作っている地方醸造家のシャトーに報告者が揃って招待され、周囲を見晴らす城の中庭で午餐会を楽しみました。野鳩の赤ワイン煮がメインの豪華な食事、数人の黒のお仕着せを着たメイドさんが、黒い影のように行き交う様子は、うねるように続くアルマニャック地方の丘陵地帯の晩夏の陽射しを背景に、まるで幻を見ているような心地にさせられたものです。

²⁴ M. A. Chazaud (éd.), *Fragments du cartulaire de la Chapelle-Aude*. Moulins 1860.

²⁵ Shoichi Sato, *Les implantations monastiques dans la Gaule du Nord: Un facteur de la croissance agricole au VIIe siècle? Quelques éléments d'hypothèse concernant les régions de Rouen et de Beauvais*, in: *La croissance agricole du Haut Moyen Age. Chronologie, modalités, géographie* (Flaran 10). Auch 1990, p. 167-77.

(8) 学位論文『修道院と農民』の執筆を終えて

クリオ：1997年、佐藤先生は名古屋大学出版会から『修道院と農民』という学位論文を出版されます²⁶。700ページをこえる大著ですが、2002年にこの業績に対して、日本学士院賞という名誉ある賞が授与されました。この主著の周辺について、お話しただけでないでしょうか。

佐藤：先ほども申しましたが、『修道院と農民』の下調べは、1984年から86年にかけてパリに滞在していた時にはじめました。これは書物の後書きにも書いたことですが、当初パリで研究する予定にしていたのはサン・モール・デ・フォッセ修道院の所領研究でした。現在ではパリの中心からあまり離れていないところに敷地だけが残るこの修道院は、7世紀に創建された有力修道院のひとつです。パリの西や北にはサン・ジェルマン・デ・プレやサン・ドニなどの領地が点在していますが、このサン・モール・デ・フォッセの所領は、ブリ地方をはじめとして、主にパリの東の郊外に集まっていたと思われます。詳しい研究がなされていないので確たることは言えないのですが、一応仮にそう想定しておきましょう。しかしこの修道院のカルチュレールは未刊行なのです。一度ジャック・ブサル（Jacques Boussard）が校訂を手がけ、彼が転写したタイプ原稿がパリ郊外のヴァル・ド・マルヌ県文書館に保存されており、当時近くに住んでいたジャン＝シャルル・ピカールさんの紹介で現物を見たことがあります。それで私の計画は、まずはこのカルチュレールを編纂し、これを基礎史料にして、12世紀頃までのこの修道院の所領構造を解明するとともに、中世初期パリの東郊の農村社会の姿を描こうという遠大なものでした。しかしさる大先生にやんわりと牽制されて、計画はあえなく挫折したのです。この経緯を後に実名を挙げてフランスの歴史家仲間の何人かに話したら、「そんなこと気にしないで進めれば良いのに」と、ハッパをかけられてしまいました。時間があれば、再チャレンジをしてみたいですね。ここまでは『修道院と農民』の前史です。

クリオ：紆余曲折があったのですね。

佐藤：最初の予定計画はこうして頓挫しましたが、その後、古書体学者のジャン・ブザン（Jean Vezin）先生に勧められて、トゥールの会計文書の研究をやってみようということになりました。同じ会計文書の古書体学的研究を進めていたブザン先生とならんで、会計文書の解説をされたピエール・ガノー（Pierre Gasnault）先生にも大変なお世話になりました²⁷。先生は当時フランス学士院の建物の一角にあるマザラン図書館の館長をされていたのですが、わからないことがあれば直ちに聞きにいったものです。そのときは常に的確な情報と助言が与えられました。同学の士への無償の行為としての知識の伝授の見本のような方です。ただし、フランスの学者世界では歴史家と古文書学者とのあいだに厳しい分業の掟があり、古文書学者は文書の内容分析に立ち入らないという不文律を、少なくとも或る世代以上の人たちは共有しています。

クリオ：職人意識のようなものなののでしょうか。

佐藤：彼らは、『修道院と農民』の根本史料となったトゥールのサン・マルタン修道院に伝来する断片文書をテキストとして解説し、その転写本は作ります。しかし、そこに書き込まれた記録をどのような歴史のひと齣として読み解くのかは歴史家の仕事であるとする認識は徹底しています。翻って、私の問題関心は古代から中世世界への転換の歴史過程を辿るところにあります。農民の地位がどのようであったとしても、この会計記録には修道院が農民から賦課を徴収した現実が書き込まれています。そして書かれた時代は、書体から見て明らかに8世紀以前です。となれば、実際の徴収の現場で使われた可能性の大きいこの文書群の研究は、古代から中世に移行する時代の領主と農民の関係を照らし出すまたとない史料であるはずだ、と考えました。むろん19世紀的な実証主義の規範では、そのあまりに断片的な在り方は「完全性の批判」の基準に照らして、分析対象の俎上に乗せてはいけない性質のものなのかもしれませんが、あえてその禁を破って冒険に乗り出したわけです。

²⁶ 佐藤彰一『修道院と農民 会計文書から見た中世形成期ロワール地方』（名古屋大学出版会 1997）。

²⁷ Pierre Gasnault (éd.), *Documents comptables de Saint-Martin de Tours à l'époque mérovingienne, avec une étude paléographique* par Jean Vezin. Paris: Bibliothèque nationale 1975.

クリオ：作業を進めている間、フランスの先生方から何らかのリアクションはあったのでしょうか。
 佐藤：『修道院と農民』のあとがきにも書きましたが、トゥベール先生は、「佐藤、「会計文書」のような断片的なものから何か言えるとは思えないがね」と言っていました。彼は史料の豊富なイタリアをフィールドとしていますからね。確かにそうかもしれませんが、よく見ていけば、地域ごとにある程度のまとまったデータが残っていることがわかってきましたので、これはいけるという感触はありました。

クリオ：『修道院と農民』は、欧米でも従来ほとんど研究のなかった、トゥールのサン・マルタン修道院に伝来する7世紀の「会計文書」を利用したという点において、オリジナリティに富む研究だと思いますが、海外からの反応はあったのでしょうか。

佐藤：『修道院と農民』の中で一番オリジナリティに富むと考えた部分については、『*Journal of Medieval History*』と『*Early Medieval Europe*』という国際誌に、それぞれフランス語と英語で公表しました²⁸。それ以外にもオリジナリティがあると思っている部分は、時間をみつけて仏訳を進めているのですが、まだ終わりません。さほどの分量ではありませんが、なにせフランス語で書くとすると、ただ訳せばよいというものではなくて、レトリックも考えなくてはいけませんし、そうなる程度にまとまった時間が必要です。フランスの多くの中世史家からも書物をフランス語に訳すよう求められていて、そのうちにと答えているのですが…。ただ、幸いにして、既に公表した英語とフランス語の論文は、まったく私が知らない研究者も含めて、海外の研究文献にときおり引用されているのを見ます。ですから、狭いサークルではありますが、中世初期を専門にしている欧米の研究者のなかでは、ある種のオリジナリティを持った研究として理解してもらえたのではないかと思います。クリス・ウィッカム（Chris Wickham）も、最近出版した大著のなかで、引用して批判もしています²⁹。ただ彼も、その批判にそれほど自信がないようです。どういうことかと申しますと、彼は「会計文書」に記載される記録を租税徴収の成果だと考えています。他方私は、確かにそれはもともと租税だったと思いますが、それが修道院に吸収される段階で租税としての意味合いはなくなり、領主制的な賦課に近いものになっていたのではないかと考えたのです。ウィッカムは租税論者ですから、賦課ではなく租税と捉えたわけですが、しかし7世紀は移行の時代だから、私が指摘する側面もあったのかもしれないと言葉を濁しています。ですから、勝負はついていないですね。

クリオ：『修道院と農民』の準備をされている間に、他に何か得たものというものはあるのでしょうか。

佐藤：まだ材料はあるのに活字にしていないものとして、というよりまだ詰めていないので活字にはできないのですが、当時のサン・マルタン修道院長アゲリクスについての個人的な来歴の研究があります。実はこれをとことん突き詰めると、7世紀のサン・マルタン修道院とイングランドとの関係を解明する手がかりとなる、非常に大変な作業になりそうなのです。中世史を専攻されている人は、「聖人祝日暦（martyrologium）」という史料カテゴリーをご存じでしょう。古くはアドンの祝日暦が、9世紀にはその後広く普及したウズアルドゥスのそれなどが知られています。そのアゲリクスという名前は、後世の聖人祝日暦の4月11日（Tres Id. Aprilis）にはでてくるのですが、これが古い祝日暦には記載されていないのです。16世紀になってようやく、ヴェネツィアで作られた祝日暦の4月11日の項に記載されるのです。なぜこうしたことが起こったのか少し調べたのですが、どうやらそれまであまり知られていなかった祝日暦の写本が知られるようになった結果らしい。その写本は17世紀にあのパーペンブロークが、当時愛書家で知られていたローマ貴族アルテンブス大公の蔵書の中で見ているはずです。その蔵書はオットボニ家（Ottoboni）出身の教皇アレクサ

²⁸ Shoich Sato, L'agrarium: le charge paysanne avant le régime domanial, VIe-VIIIe siècles, in: *Journal of Medieval History* 24-2 (1998), p. 103-25; Id., The Merovingian Accounting Documents of Tours: Form and Function, in: *Early Medieval Europe* 9-2 (2000), p. 1-19.

²⁹ Chris Wickham, *Framing the early Middle Ages: Europe and the Mediterranean 400-800*. Oxford: Oxford UP 2005, p. 109 n. 136.

ンデル 8 世が蒐集した一群の文書や写本と一緒にされ、その結果パチカンの蔵書に加わりました。ちなみに、スウェーデン女王の位を捨ててカトリックに改宗し、ローマに棲んでいたクリスティーナ——あの下村寅太郎さんの傑作の主人公³⁰——が他界した折、彼女が蒐集した貴重な蔵書を購入したのもこの教皇でした。

クリオ：未刊行の写本を探索することになりますね。

佐藤：私はパリ長期滞在中の 1986 年に 1 週間ほどローマに出かけ、18 世紀に作られた手書きのカタログを元に、パチカンのオットボニ文庫 (Fonds Ottoboni) を絨毯爆撃的に調べあげ、ようやくパーベンブロックが見た写本を特定することができました。それが聖人祝日暦を内容とするオットボニ・ラテン写本 163 番の写本です³¹。実はパチカン図書館では、1 日に請求して閲覧できる書物の数は 3 冊か 4 冊で、とにかく大変少なかった。また閲覧時間も午前中だけでした。これでは埒があかないと考えて、午後も作業ができて、制限冊数も緩めてもらうように特別の許可を図書館長に願い出ました。そのために館長の執務室に連れて行かれたのですが、あれは一見の価値のある、素晴らしく豪華な部屋でした。ローマの魅力の一つは学術関連の施設が、ほとんど文化遺産に属するような建物の中に入っていることです。ローマ・フランス学院が入っているファルネーゼ宮もそうですね。2004 年、私はパリからの帰途、ローマで開かれていたバルテルミイ君主催の「中世の復讐」をテーマにした国際研究集会に出席しました。その時は報告者でなかったにもかかわらず、学院長の好意でミケランジェロが設計の一部に関わったこの広場で豪華な大広間で開かれた晩餐会に招待されました。こんなに素晴らしい経験ができるのであれば、学者稼業もまんざら捨てたものでもないなと思ったものです (笑)。

クリオ：発見した写本はどのように扱ったのでしょうか。

佐藤：このオットボニ・ラテン 163 番の写本を、アルテンプス大公が一体どこから手に入れたのかを明らかにしなければなりません。そのためにはこの都市ローマの大公の蔵書が構成される過程を解明する必要がありますが、これがなかなか大変なのです。ただ件の写本に関しては、その出所を示す手掛かりがないわけではありません。写本の表紙に「Collegii Angelicae」と読める 2 語が鉛筆で走り書きされていますが、これはイギリスのソールズベリのある修道院を指しているらしいのです。そこでソールズベリに出かけて調べて見たのですが、それらしき修道院の古い蔵書目録には行き当たりませんでした。そこで調査は中断しています。仮にこの写本がソールズベリで作られたとすれば、なぜ特に有名でもない 7 世紀後半のアゲリクスの名前が、イングランドで作られた聖人祝日暦にだけ登場するのかを説明しなければなりませんね。

クリオ：まだ先に進むことができるのですね。

佐藤：長くなりますが、ここで思い起こされるのが著名なベータ『イングランド教会史』の第 4 書 18 節です³²。『修道院と農民』にも書いたので詳しくは述べませんが、ちょうどアゲリクスがサン・マルタン修道院長を務めていた頃、ローマの教皇庁の聖職者だったヨハネスという人物が、典礼聖歌をはじめとするローマ典礼を普及するやうにとの教皇の命令を受けて、イングランドに出発します。その途中、彼はトゥールのサン・マルタン修道院に立ち寄ります。ヨハネスはここでイングランドの情報を仕入れるとともに、現地の事情や言葉に詳しい修道士を案内役に付けてもらったのではないかというのが、私の推測です³³。そういった推測があるものですから、その後カール大帝に仕えたヨーク出身のアルクインがサン・マルタンの院長になるのは、単なる偶然ではない印象があります。ありていに言えば、トゥールのこの修道院は南イングランドと密接な交渉を持っており、アゲリクスの記憶がなんらかの形でこの地域に残っていたのではないかと思いをめぐらすのは、な

³⁰ 下村寅太郎『スウェーデン女王クリスチナ バロック精神史の一肖像』(中央公論社 1975)。

³¹ この調査過程に関しては、『修道院と農民』139 頁の註 67 を参照。

³² ベータ(長友栄三郎訳)『イギリス教会史』(創文社 1965)。

³³ 『修道院と農民』119-23 頁。

なかなか愉しい知的営みです。いずれにしても、今後オットボーニ・ラテン 163 番をきちんと転写し、そこから特異な聖人を洗い出して、どの地域で作成された写本かを特定するための作業を進めなければならぬと考えています。

クリオ：まだ旅路が終わったわけではありませんが、心躍る知的探求ですね。

(9) コレージュ・ド・フランスでの講義

クリオ：先生は 2001 年に半年間フランスに滞在し、その間、エクサン・プロヴァンス大学、パリの社会科学高等研究院、ソルボンヌ高等研究院、そしてフランス最高の知性が集うコレージュ・ド・フランスで講義をされています。この時の様子についてお聞かせいただけないでしょうか。

佐藤：コレージュに招聘されたのは、2001 年 5 月の後半から 6 月の前半にかけての 1 ヶ月です。前年の秋だったと思いますが、当時コレージュの理事長だった——19 世紀の終わりから学長をこう呼ぶようになった——ビザンツ学者ジルベール・ダグロン (Gilbert Dagron) 先生の名前で招聘状が届きました。実はこのダグロン先生には思い出があります。1984 年に 2 度目の長期滞在でパリにいた時のことですが、リシェ先生の推薦で、ロベール＝アンリ・ボチエ (Robert-Henri Bautier) とフィリップ・コンタミーヌの 2 人が共同推薦人となり、私は「フランス国立歴史考古学会 (Société Nationale des Antiquaires de France)」の外国人会員に選出されました。同じ頃ダグロン先生は正会員に選ばれたのですが、ちょうど同じ日にルーブル宮の一室であった定例報告会に初出席いたしました。議長が他のメンバーの方々に新会員を紹介した後に、署名のためと思しき分厚い出席簿が回って来ました。私が署名しようとする、リシェ先生は「それは正会員用の記録なので、君は署名しなくても良い」と注意してくれました。そこで隣に座っているダグロン先生に出席簿を渡したのですが、彼は少し紅潮した面持ちで「いや、私も署名しない」と言って、隣の席の人にこれを回したのです。多分、私が署名できないことで面目を失したと考え、私が感じたに違いない屈辱感を和らげようとの配慮から出た行動だったのでしょうか。実を言えば、私は別にこれで恥ずかしい思いをしたと感じたわけではありません。言ってみればこれはダグロン先生の思いこみであったのですが、その気遣いには胸が熱くなりました。ダグロン先生には記憶として残るほどではない瑣事ですが、私にとっては忘れがたい出来事でした。概して一流の学者には、こうした心配りの細やかな人が多いという印象があります。

クリオ：そのような配慮できる方が、10 数年を経てコレージュ・ド・フランスの理事長を務めることになったのですね。

佐藤：そんな思いもありましたので、「ピエール・トゥベール教授の提案のもと、コレージュ・ド・フランス教授会の総意により…」と記された招聘の手紙を受け取った時の心持は格別でした。それでほとんど躊躇することなく、承諾の旨を伝えました。自分でもいい度胸だなと思いますね。

クリオ：具体的に、どのような講義をされたのでしょうか。

佐藤：講義は 1 週間に 1 コマで、計 4 コマが義務づけられました。条件は日本に関わる問題を 1 つは取り上げることでした。そこでトゥールの会計文書について 3 コマを費やし、最後の 1 コマを「開国 (明治) 以後日本史学史におけるヨーロッパ中世研究 (L'étude de l'Europe médiévale dans l'historiographie japonaise depuis l'ouverture du pays (Meiji))」にあてることにしました。忘れもしない初講義は 2001 年 5 月 22 日の午後 5 時からで、第 1 講義室が割り当てられました。玄関の入り口に入ってすぐ右側の、玄関前の前庭からも授業の様子が見える部屋です。開始の 30 分ほど前に行ったら大変な人だかりなのです。受付には報道陣対応のデスクも設えてありましたから、まさか私の講義ではないだろうと思いました。そのとおりで、大群衆は、私と同じ時間に講義が予定されている、ノーベル経済学賞を少し前に受賞したケンブリッジ大学のアマーティア・セン (Amartya Sen) 博士の講義目当てでした。それでも私の講義には、知らない顔ぶれが 10 人ほどいました。日本でも高名なさるコレージュの先生は、就任講義はともかく普段は奥さんも含めて渺々たる聴衆で、し

かもその多くは、次の時間にその教室で行われるミシェル・フーコーの講義の席取りが目当てだったという笑い話があります。まあそんなところでしょうね。彼らフランス人から見れば、地球の反対側にある極東の島国の学者が、フランス人でさえ忘れかけているメロヴィング時代の修道院で作られた会計記録の断片を研究し、それがまあ学問的に意味のある仕事で、これをフランスの学術の頂点にあるコレージュで正式な講義の形で話すというのは、ちょっとシュールな感じかもしれません。トゥベール先生であれば、「サン・ブラッグ（冗談でなしに）？」と仰うことでしょうか。

クリオ：どのような感じで講義は進められたのでしょうか。

佐藤：初講義の日は、トゥベール先生がどうしても都合がつけられない事情があったので、そのかわりに中世フランス文学が専門のミシェル・ザンク（Michel Zink）教授が紹介の労を取ってくれました。講義終了後には、私の名前と年度を刻んだ講義記念のメダルを頂戴したのですが、その時ザンクさんは、「自分は専門が違うので内容の評価はできないが、佐藤の講義は雄弁の伝統を蘇らせてくれた」と挨拶をしてくれました。過分にすぎる話ですが、むしろ嬉しかったです。これは正直に言っておかねばなりません、このような高い評価はかなりの程度、講義原稿の添削者の力量のおかげです。パリ第4大学のビザンツ学者であったジャン・ガスク（Jean Gascou）教授がその人です。私としては文法的な間違いのチェックだけでよかったのですが、彼はときおり語順を変えたりするので。そうするだけで言葉の伝達能力が全く変わってくるのです。各講義は、第1回「ポスト・ローマ期の租税徴収から中世初期の所領へ」、第2回「トゥールのサン・マルタン修道院会計文書を緩やかな租税システムの変動の中に位置づける」、第3回「国庫の後継である司教所領と修道院所領の間の“ミッシング・リンク”を求めて」と題し、そして第4回は先ほど紹介したように、日本の西洋中世史研究を紹介した話で締めくくり、無事終えることができました。ちなみに翌年は、当時バーミンガム大学で教鞭をとっていたクリス・ウィッカム教授を招聘されたようです。

この間、コレージュのゲストとして、サン・ジェルマン・デ・プレとセーヌ川に挟まれたフォンダシオン・ユゴー（Fondation Hugo）と呼ばれるコレージュの宿舎に滞在しました。垂木がむき出しの16世紀に建てられた古い建物で、広大な前庭に続く巨大で重い門扉を開けて一步外に出ると街の喧噪が耳に飛び込んでくるのですが、門を閉めるとそれが嘘のように森閑とした空間に変わる、不思議な場所でした。長い歴史のなかで、コレージュの使命に共感する篤志家がさまざまな寄付をしているのですが、このフォンダシオン・ユゴーもそうしたものの一つだということです。パリだけでなく、プロヴァンス地方や各地にこの種の寄付財産があり、コレージュの資産として有効に活用されていることを考えると、日本の学術機構のあり方、ひいては日本社会の学術に対する認識のあり様に思い至らざるを得ません。

3. 教育者として

（10）講義について

クリオ：先生は研究者であると同時に、30年にわたり大学教師として、若い大学生を相手に歴史学を教えてこられました。どのような講義をされてきたのでしょうか。

佐藤：大学の講義としては、大きく分けて概説と特殊講義があると思いますが、私はほとんど特殊講義を軸に教育を行ってきました。最初に就職した愛知大学では、法経学部の西洋法制史担当ということもあり、もっぱら古代ローマから15世紀までのフランスを中心にした概説を講義しました。講義の内容は、自分なりに作った概論です。これは今見てもなかなか良くできた講義録だと思っていますし、愛着があります。しかし名古屋大学の文学部に移ってからは、特殊講義が中心になりました。今はもっぱら半期単位になりましたが、数年前までは全部通年の4単位授業でした。皆さんにお配りしたプリントに、私が名古屋大学に在職してからの講義のタイトルをまとめておきましたが、ご覧になればお分かりのように、自分の個人的な関心に依じての内容になっています。後で書物になった、たとえば山川出版社の『世界歴史体系 フランス史』、中央公論社『世界の歴史』、岩

波書店の『岩波講座世界歴史』のもとになった講義などは多少概説めいていますが、それ以外は特殊講義です³⁴。

クリオ：毎回どのような講義ノートを作成して授業に臨まれるのでしょうか。

佐藤：私は毎回作った講義ノートをただ読み上げるということはずせず、なるべく学生に語りかけるという形で講義を進めています。少なくともそのように努力しています。実はいま名古屋大学のホームページにある「名大の授業」というコーナーで、私の講義概要が紹介されています。2006年度前期分の講義「ポスト・ローマ期ヨーロッパの表象構造」ですが、講義の目的についての「一分間授業紹介」というインタビュー、シラバス、試験問題、模範解答、文献目録、授業で使った史料や地図、そして講義ノートも含めて全て公開されています³⁵。講義ノートは60ページ分くらいあるのでしょうか。拙いもので完結はしていませんが、ダウンロードして読むことができますはず。著作権は私にありますが（笑）。すでに終わった授業なので学生は関心ないでしょうが、それでも何らかの足しにはなるでしょうし、いずれ時間に余裕ができたなら、このノートに基づいて書物を書こうと思っています。

クリオ：先生は、講義ノートの公開に対しては特に…。

佐藤：私はそれほど懸念を持っていません。一応著作権で守られていますし、政治的な意味合いのあることは話しませんし…。たとえば、内容が盗まれるということでしょうか。

クリオ：というよりも、書物にする前の、ある意味未完成の状態を公開するということなのですが。

佐藤：それはあまり気にしていません。実際に書く段になったら、とんでもなく違ったものになっているはずですから。もちろん全部出すつもりはありません。今回の件はたまたま大学から頼まれたのですが、そういうことを頼まれるのは悪い気はしませんので…。言葉が悪いですが、おだてに乗ったというところでしょうか。あまり賢明なことではないのかもしれませんが。

クリオ：先ほど、大学での講義には概説と特殊講義の2つがあるとおっしゃいましたが、先生は主として特殊講義を担当されています、特殊講義のメリットは何でしょう。

佐藤：旧帝大系の大学では、多分特殊講義が講義活動の中心というのが伝統ではなかったでしょうか。他大学の事情を十分知ってはいないので、あるいは間違っているかもしれませんが。それは研究者を養成する目的があるからです。ここからは私の個人的な見方ですが、研究者になろうというレベルの若者を教育するとき、一番重要なのは知識ではなく——知識は書物から自分で学ばばいいのです——、少し僭越なもの言いになりますが、教える側がいかにかに学問を愉しんでいるかを垣間見せることであると思うのです。それを示すには、特殊講義が最良の形式であるというのが私の考えです。それは現在進行形という形で研究の現状を開示することになります。教師が自分の選んだテーマにどんな史料を使ってアプローチするのか、旧来の学説にどのような問題点があって、それをどの方向に克服していこうとするのか、そしてその先に何が見えてくるのかといった、歴史を研究する上での様々な難問を学生の前に披瀝し、一緒に考える、あるいは検証する機会になります。講義する側としては手の内をすべてさらけ出すことになります。それは講義をする側にも、講義を聞く

³⁴ 1994年度講義「フランク国家論 その成立と展開」は、佐藤彰一「フランク時代」柴田三千雄他編『世界歴史体系 フランス史1』（山川出版社 1995）、129-81頁として、1996年「中世世界の形成」は、佐藤彰一・池上俊一『世界の歴史10 西ヨーロッパ世界の形成』（中央公論社 1997）として、1997年「形成期西欧中世の基本構造とその展開」は、佐藤彰一「古代から中世へ」『岩波講座世界歴史7 ヨーロッパの誕生4-10世紀』（岩波書店 1998）、3-78頁として、1999年度後期「フランス中世社会史」は、佐藤彰一「ポスト・ローマ期から中世へ」、「中世フランスの国家と社会」福井憲彦編『新版世界各国史 フランス史』（山川出版社 2001）、55-143頁として、2003年度後期『歴史十書』のテキスト科学は、佐藤彰一『歴史書を読む 『歴史十書』のテキスト科学』（山川出版社 2004）として、公刊されている。

³⁵ 講義ノートのURLは (<http://ocw.nagoya-u.jp/files/53/lecturenotes.pdf>)。

側にとってもエキサイティングなことなのではないでしょうか。そんなふうに考えてずっとやってきました。自分ではコレージュ・ド・フランス方式と密かに思っていたのです(笑)。コレージュでは何回授業をするかは教授の判断に委ねられていることをご存知でしょうか。ただ年度の終わりに、教授会で事務局長が一人ひとり何回講義を行ったか、その回数を読み上げるのだそうです。当然多い人もいれば少ない人もいます。唯一守らなければならない規則は、2度同じ話はしないということだそうです。私はこれが気に入っており、自分も基本的にはそうしたスタイルの授業を心がけてきました。

クリオ：学生の反応はいかがでしょう。

佐藤：何年か前から学生の受けとめ方が、微妙に変化してきたことを感じています。「歴史家のアトリエ」にはあまり関心を示さず、確実なことを教えてくれといった傾向が増えてきたように思います。括弧付きの「確実な歴史」などというのは自分で書物を読んで習得することで、大学の講義に求めるものではないというのが私の考えですが…。そのように学生の気風も考えも変わりますと、結局書物を読めと言っても読まないのですから、書物を読ませる代わりに授業をやらざるを得ないというのが偽りのない現実です。もちろん一方では概説的な叙述の面白さも意味も理解はしています。ただその概説は学生諸君が期待する概説の内容とは異質のものですがね。いずれにしても西洋史の概説は、少なくとも名古屋大学の場合、学生の自学自習に近い形になってしまいます。これには制度上の理由があって、教養教育が大綱化されて教養部が廃止されたため、現在名古屋大学には文学研究科のスタッフ以外、西洋史を教える人がいないのです。各教員は思いおおいに工夫を凝らして概説的なことをやっているようですが…。なんとかしなければならぬ問題ですね。

クリオ：以上は講義についてでしたが、演習ではラテン語を講読されているのですか。

佐藤：残念ながら、ラテン語での演習はほとんどやっていません。まず学生が来ません。いま、中世を専攻する大学院生は少ないので、あえてそこまでやる必要はないというのが現状に基づいた判断です。ただ大学院生がラテン語講読を望んでいることは知っています。しかしここ数年はCOEの仕事がかなりの重さをもっていましたので、私にはこれ以上は無理というのがありました。そのかわりに最新の研究書の講読を続けています。今はクリス・ウィッカムの近著を読んでいます。ようやく百十何ページかまで来ました³⁶。千ページ近くありますので、全部は終わらないでしょうが。ただ、外書を読んでそれをもとにディスカッションするというのはなかなか難しいです。私が一方的にいろいろコメントをするくらいですね。

クリオ：以前から研究書講読だったのでしょか。

佐藤：ここにいる加納君が院生だったころは違いました。当時は『サン・ヴァンドリーユ修道院長事績録』の講読していました³⁷。今思い返すに、とくに初めの頃は恥ずかしくなるような誤訳をしていますね。しかし後にフランス語訳が出たときに確認したところ、基本的なところは正確に読めていることが分かりました。出席していた院生には、当初文法的知識が十分でないのに、どうして読めるのだろうかと思われていたのではないのでしょうか。実践で段々キャリアを重ねていくとコツが掴めてきます。文法的には、院生のほうがよく知っていましたね。なかには、ラテン語をイタリア語風に発音するのが堂に入った人もいました。私はそのうち、ラテン語に近い文法構造をもつフランス語にまず訳し、しかる後に日本語に直すことをしばしばするようになりました。とにかくそれを3年くらいかけて読み通したでしょうか。ラテン語講読はこの時が最後です。

³⁶ Chris Wickham, *Framing the early Middle Ages: Europe and the Mediterranean 400-800*. Oxford: Oxford UP 2005.

³⁷ S. Loewenfeld (rec.), *Gesta abbatum Fontanellensium* (MGH. SS. Usur. Scholarum 28). Hannover: Hahn 1886; F. Pascal Paradie (éd.), *Chronique des Abbés de Fontenelle (Saint-Wandrille)* (Les classiques de l'histoire de France au Moyen Age 40). Paris: Les Belles Lettres 1999.

(11) 通史を書く意味

クリオ：先ほど、概説の話がありましたが、仮に概説の講義を進める場合、どうしても参照するべき通史が必要であるように思います。通史についてはどうお考えでしょうか。

佐藤：歴史家が通史を書くことの意味は大きいですね。先ほど、私は歴史というのは必ずしも時間の流れではないと考えるようになってきた、と申しました。一昨年になりますが、社会科学高等研究院の院長であったジャック・ルヴェル (Jacques Revel) さんとフランソワ・アルトク (François Hartog) さんの2人が来日しました。幕張の放送大学で研究会が開かれたのですが、その後2人は京都に行かれまして、東京に戻る途中に名古屋に立ち寄っていただきました³⁸。その時は伊勢神宮を案内し、その道すがらいろいろ話をしました。またその後新潟大学でも研究会が開かれ、そこでも議論したのですが、ルヴェルさんは、「歴史というのは不連続である」と言うのですね。ですから、彼も歴史はひとつの流れであるという見方に与しているわけではないようですが、そのことについては「君が今度パリに来たときにゆっくり話をしよう」と言われています。まだそのままになっていますが。補足して言うと、ルヴェルさんは物価史を専門としていました。ご承知のように物価史というのは連続したデータが残っている例が少なく、ダイアグラムを描いても、データがないところは切れているのが普通です。ですから、そういった彼の研究フィールドが、歴史が連続していないという認識を彼に植えつけている1つの原因かなという感じもしています。少し異なる角度からではありますが、先ほど述べたヴェーヌの『差異の目録』にある歴史観、つまり歴史は一種の構築であるとする認識と共通しています。彼らが共有している構築が、世情よく言われる構成主義と同じかどうかは、私にはわかりません。ただ、仮に歴史がそのように構築されたものであったとしても、歴史をひとつのストーリー、つまり通史として語ることは、すべての歴史家が歴史家である限り果たさなければいけない義務だと、私は端的に考えています。

クリオ：通史を書く作業は歴史家としての義務であると。

佐藤：はい。通史を書くことは大変だと思います。その作業はその人の歴史観全体を映し出し、そのもっている知識と歴史的判断力をすべて注ぎ込むことにならざるをえません。職業的な務めであると同時に、非常にチャレンジングな作業です。と申しますのも、通史を書くという作業を通じて新たな発見をし、今まで気がつかなかったことに気がつくことは多いはずで、そして何よりも勉強しなければいけません。それが歴史家にとって大きい意味を持つてくるのではないのでしょうか。

クリオ：いまおっしゃられたのは書き手にとっての意味ですが、それでは教育的な観点からすれば、通史にはどのような意味があるとお考えでしょうか。

佐藤：初学者が全部の知識を自前で備えることは困難です。ですから初学者に対しては、それがたとえカッコつきであったとしても、ある「全体像」を提示することは教育上必要だと思います。すべての人がこの考えに同意してくれるかどうかはわかりませんが、中世史に関していえば、はっきり申し上げて日本で教育的に効果のある通史は書かれていません。もちろん皆さんそれぞれが努力して良い通史を書こうとしているのは疑いえないことですが、まだそれは十分に達成されているとは言いがたいでしょう。このように申しますと、歴史を川の流れのように考えるのは正しくないという見解とは一見矛盾するように聞こえるかもしれませんが、それは違います。通史は因果関係の連鎖であると同時に、絶えざる意味づけの作業でもあるのですから。ただの川の流れのような事実景観の移ろいではないのです。優れた通史が書かれることによって、多分歴史学という学問が、法則探究的な抽象性の高い学問から、もっと直截に人間を「わかる」ための、そして判断力を鍛える重要な教科としての意義を獲得するのではないのでしょうか。

クリオ：今先生がおっしゃいましたように、日本で十分な内容を持った中世史の通史が書かれていないとすれば、それは何が原因なのでしょう。

³⁸ 平成15年度日本学術振興会・人文・社会科学振興プロジェクト「教養教育の再構築」(2005年2月21日)。

佐藤：おそらくこれは日本の西洋史学が抱えている最大の問題のひとつだと思いますが、西洋史学とは最も事実性に執着してしかるべき学問領域であるにもかかわらず、いわゆる「学殖 eruditio」をないがしろにしてきたように思います。事実はその「代表性」のゆえに大事なのであって、事実そのものではないという考えが抜きがたくあるのではないのでしょうか。自国民の歴史でもないのに、なぜ「片々たる事実」についての知識の有無がことさら云々されなければならないのか、というのが左右両派に共通した観念のように思います。また西洋史に関して、日本には学会というものがありません。もちろん、西洋史家の大きな集まりとして、日本西洋史学会はあります。しかし、職業倫理を共有し、本当の意味でのメンバーシップを持った西洋史の学会は、厳密な意味では存在していません。これが1つは、教育効果のある標準的な概説がないことに、どこかで繋がっているように思います。ここはぜひ東京大学の諸先生が中心となって、学会を組織して欲しいですね。大学で教える時期もそろそろ終わりになろうとする今になって、ことさらこうした宿痾の存在を痛感しています。

クリオ：参考までに、フランスの大学ではどのような教科書が用いられているのでしょうか。

佐藤：大学の初年次生がどのような教科書を使うのかよく調べてはいませんが、私の記憶では初年次から特殊講義をやっていました。ただ高校（リセ）の教科書はかなり分厚くて、ブラックアフリカの歴史まで含まれています。上の娘は、小学校高学年から中学（コレージュ）2年までパリの郊外の学校に通いましたが、中学1年の授業で、ギリシアの奴隷制とローマの奴隷制の違いを教えていました。それは一例ですが、それを聞いて、しっかりした教育をやっているのだなと思いました。ですから、フランスでは、中学校から大学までの積み上げはしっかりしているのだと思います。日本との違いといえば、フランスはやはり事実としての歴史に集中していることではないでしょうか。日本では歴史学とは何ぞやという、方法論にかかわるような歴史学概論がありますが、フランスではそれは哲学の領域に入るのでしょう。歴史哲学的な歴史学概論は、ある意味で日本の歴史教育のひとつのメリットかもしれませんが、あまりにも観念的になりすぎるとかえってマイナスかもしれません。繰り返しとなりますが、この点はすこし考えないとまずいのではないかという気がします。

(12) 教育の組織化

クリオ：日本の現行の大学教育制度について、何か考えはございますか。

佐藤：大学での西洋史教育は、きっちりと組織化する必要があります。これは提言めいたものになってしまうのですが、私は思い切って授業時間を、今の100分や90分から1時間にすればよいのではないかと思います。そうしますと、1日の授業コマ数が増えて、午前中3コマ、午後5コマで、1日8コマくらいできるのでしょうか。今では私も正直はじめの5分くらいは講義とは直接関わらない話をしているのですが、1時間の授業となると教える側はかなり濃密な時間の使い方をしなければいけません。ただ、名古屋大学文学部は教室の数が少ないので、コマ数が増えるとやりくりが大変ですが（笑）。フランスは完全に60分授業ですね。休み時間もありませんので——少なくとも私が学部教育を受けた時期のカン大学ではそうでした——、学生はみんな走って次の授業の教室に向かいます。だから授業オーバーもあんまりできないのですが。ただし、1コマを60分にした場合、大学卒業のための単位数を今より沢山とらなければいけなくなるという難点があります。授業時間を短くすると、自動的に通年の単位数が4単位以下になるからです。

クリオ：授業時間を短縮した上で、あとは何をしていけばよいのでしょうか。

佐藤：これは大枠でどのようなスキームを作るかによると思うのですが、現時点では私は基礎教育と高い水準での教育をはっきりと分けたほうがよいと思っています。後者はこれまでのように特殊講義でよいのですが、基礎教育はまだ考える余地があるでしょう。その場合に重要となるのが、通史です。これはすでに申しましたように、教える側にとっても必要ですし、教えられる側も一定のパースペクティブを持つことができます。そこに、アメリカ風にリサーチ・アシスタントやティーチング・アシスタントをしっかりと動員すれば、専任教員の負担もそれほど増えませんが、同時

に若い人たちの教える訓練にもなります。しかし、改善をするといっても、ひとりではどうしようもありませんので。

クリオ：大胆な教育改革だと思うのですが、それは先生の時代と今とでは学生の質が変わってしまったという、先ほどお話に出たような事情が背景にあるのでしょうか。

佐藤：私は戦前の旧制高校の世代ではありませんが、その旧制高校がなくなっても、戦後のある段階までは、その遺風が残っていたと思います。つまり、学生とは学ぶことにものすごく餓えていて知的欲求が高い、そしてできる人は黙っていてもできる、という認識ですね。特殊講義というのは、一種の卓越主義といえますか、熱心な興味を持った学生にはわかる、わかる人間だけがわかればよいという発想があったと思います。しかし根本的に時代のあり方も変わってきていますし、先ほど申しましたように、現実の学生諸君はそういう風にはなっていません。そろそろ卓越主義的な考え方から離れて、教育としての西洋史を考え直す必要があると思いますね。歴史学というのは地味ですが、人文科学のなかでも特に重要な分野です。時代が変化すればするほど、普通の人間は自分の生きている時代のことしか視野に入らなくなるわけですが、歴史を学ぶことでさまざまな時代のさまざまな運命について考えざるをえなくなりますから。ですから、時代状況の変転がめまぐるしくなればなるほど、歴史学は重要な教養になるというのが私の考えです。

クリオ：そういった大学教育を進めるためには、講義を担当する大学教員の資質も問われてくるように思います。たとえば、フランスではどのような人物が大学の教育ポストにつくのでしょうか。

佐藤：フランスの大学で教鞭をとるためには、基本的には大学教授資格試験（アグレガシオン）に合格しなければなりません。これはかなり大変です。何年前からその年の試験のテーマは決まっています、受験者はそのテーマに沿って勉強をします。その時、各出版社はこぞってそのテーマの専門家に教科書の執筆を依頼するのですよ。正確には覚えていませんが、たとえば中世であれば、何年前かに初期中世史でしたし、その後にはビザンツ史が試験課題になっていた記憶があります。ですから一時期にあるテーマに関する本がさまざまな出版社から一斉に出ます。それで試験の科目の1つに模擬授業があります。その講義テーマは数時間前にくじを引いて決めるのです。受験者は、その数時間の間に当たったテーマについての講義メモを作るのです。くじですから、何が当たるかわかりません。古代史に関心をもって勉強してきた人が、第2次世界大戦直前のヨーロッパの経済状況についての講義を求められるかも知れません。「私は古代史しか知りません」では通用しません。オールラウンドな知識を持っていないと対処できないのです。というより、厳密に言えば短い時間で日頃勉強していない分野のことを、とりあえず要領よく纏めて見せる能力ですね、これが試されるのです。教授資格試験の時期になると、試験の準備に必要なかもしれないから、借り出しているソルボンヌの図書館の書物を全部返却させられます。合否を決めるのは審査委員会ですが、かつてこの審査委員長席には十数年にわたってフェルナン・ブローデルが座っていました。合格の可否を決める最終権限がある委員長は、その結果としてある一世代のフランスの歴史家群の構成を決めてしまいます。絶大な権力というほかありません。話がややそれてしまいましたが、大学の教員は、概説的な知識と即興的な構築能力が求められるので、特殊なテーマについて非常に深い知識を持っているだけではだめなのです。つまり、フランスの大学の教授資格取得者は、オールラウンドな知識を持ち、必要な情報が与えられればこれを元に、未知の分野でも即座に筋の通った話を構築できる能力の持ち主ということになるのでしょうか。

4. COE プロジェクト・リーダーとして

(13) 「統合テキスト科学の構築」の目的

クリオ：名古屋大学は、2002年度から06年度まで、「統合テキスト科学の構築」というプロジェクト名で文部科学省の21世紀COE（Center of Excellence）に採択されましたが、佐藤先生はそのプロジ

ェクト・リーダーでもありました。最初に「統合テキスト科学の構築」の目的についてお聞かせいただけないでしょうか。

佐藤：「統合テキスト科学の構築」というテーマは、プロジェクト・リーダーの私と他に14人、あわせて15人ではじめました。このCOEプロジェクトは名古屋大学文学研究科のスタッフですすめるという条件なのですが、これがかなり厳しいのです。どういうことかと申しますと、研究科全体で抱えるスタッフが少ない。東京大学の人文社会系研究科はおそらく名古屋大学の4倍、東北大学の文学研究科でも70人いるのに対し、名古屋は50人弱です。地理学、心理学、社会学といった学科が環境学研究科という別の組織に移ったので、そのぶんスタッフが抜けているのです。その厳しい条件の中で、スタッフの専門を考えて、どんな研究テーマで卓越拠点が形成可能かと考えていったわけです。その結果共通項としてあるのはテキストであるということになりました。美術史や人類学は普通の意味、つまり文字で書かれたテキストを研究対象にする分野ではありませんが、私はこれもテキストとして理解することが可能ではないかと考えました。そして言語学の町田健さん、文学の松澤和宏さんたちと一緒に話を詰めていったのです。それで、史料、文学、思想、人類学、美術史、言語という6つの部門を構成し、それぞれの分野で観察されるコミュニケーション行為の所産をテキストと捉え、そのすべてに通底する一般的な原理を探ろうと考えました。幸運にもプロジェクトは採択されて、中間評価もAまではいきませんでした。それなりに努力してやっているという評価はいただきました。

クリオ：プロジェクトを進めていて、当初予期していなかったことというのはありますか。

佐藤：それぞれの部門の長を決めて、基本的にその方に多くの責任を負っていただき、部門別に合同ディスカッションをしました。私も自分の研究とテキスト科学との接点を可能なかぎり探り、その方向でコミットメントしました。当初定めた研究テーマ自体はもちろん進めているわけですが、共同プロジェクトとして遂行しているうちに、様々な副産物が出てくることがあります。これは非常に重要なことだと思います。それから、私があらかじめ知っていたわけではないのですが、スタッフには日頃から国際的な繋がりを持っている方が予想外に多かった。これは思いがけない幸運でした。結果的には、すべての部門で国際集會を、少なくとも1回は開催しました。多いところは2回、5年間の合計で11回開催し、プロシーディングも出版しました。全く外国語だけのプロシーディングも少なくありません。それは日本語だけの読者には親切ではありませんが、私たちの狙いが国際発信であったということで、勘弁してもらわなければなりません。正直、それはかなりしんどい、時間を取られる作業でした。ですから、これまでやってきた中世史の研究に注ぐ時間が少なくなったことは確かですね。

クリオ：先生はCOEのプロジェクトの中で、2回大きな国際シンポジウムを主催されました。第1回目は2004年9月16日と17日の両日にわたる第4回国際会議「歴史テキストの生成」³⁹、第2回は2006年11月17日の第10回国際会議「歴史テキストの生成2」です⁴⁰。いずれも国内外の第一線級の研究者による口頭発表だったわけですが、どのような目的があって開かれたのでしょうか。

佐藤：ひとつは、COEのプロジェクト・リーダーであると同時に、史料部門の責任者を私はやっているわけですから、歴史のテキストとコンテキストの関係を、海外の最高レベルの研究者に開示してほしいという願いがありました。しかし、同時に他方で、こちらとしても、加納君や足立君などの若手も含め、それなりの研究水準にあるという自負もありましたから、いってみれば海外の一流研究者と対決をしてどうなるかを試してみたいという挑戦的な気持ちもありました。結果として、そこそこ成功したのではないかと思います。とりわけ私はジンメルマンさんの報告が気に入っ

³⁹ 報告書は、佐藤彰一編『「統合テキスト科学の構築」第4回国際研究集會報告書 歴史テキストの生成 テキスト／コンテキスト』(名古屋大学大学院文学研究科 2005)。

⁴⁰ 報告書は、佐藤彰一編『「統合テキスト科学の構築」第10回国際研究集會報告書 歴史・地図コンテキストの生成 テキスト／コンテキスト2』(名古屋大学文学研究科 2007)。

ています。と申しますのも、私たちの研究テーマにいちばん鋭くかみ合う報告をしてもらったと思うからです⁴¹。あの方は非常に謙虚な人柄ですから、時間オーバーしたことをものすごく気にしていて、それで自分でも気落ちしたみたいところがあったようですが、この研究集会はプロシーディングになっていますが、残念ながら日本語バージョンはありません。日本語も作ってはいたのですが、結局収録しませんでした。2回目の地図テキストを含めたシンポジウムは、1回目ほどの広がりをもつことができませんでした。金尾健美さんにもご協力いただいたのですが、時間の関係で十分計画を煮つめることができなかったのが理由です。10月23日から25日にエクサン・プロヴァンスで開いた第8回国際会議から2週間しか経っておらず⁴²、誰もが疲労困憊していましたので。こちらは日本語訳がついた形で出版されています。もう少し余裕があれば、きっちりと準備をしてより充実した内容で皆さんにお届けできたはずなのですが、力不足でした。しかし、パトリック・ゴーチエ＝ダルシェによる地図テキスト論は1つの成果でした⁴³。著作権の関係で図版が収録できなかったのが残念です。そのときの挨拶でも申しましたように、『史学雑誌』に山辺規子さんが書かれた『西洋中世学入門』の書評で、そこで取り上げた史料類型の中に地図テキストのテキスト論がないことを指摘されていたのですが⁴⁴、そうした日本における研究の欠落を補うことはできたのではないかと思います。プロジェクト自体はこの3月で終わりますのでちょっと先行きはわかりませんが、これから地図テキストを積極的にわれわれの研究の中でどれだけ取り込めるかというのは一つの焦点となってくるでしょう。いままで日本史の側では地図テキストについての蓄積がある程度ありますが、ヨーロッパ史ではほとんどありませんでしたので、その先駆けとしての意味合いはあるだろうと思います。

クリオ：5年間、大変な作業を積み重ねられてきたわけですが、「テキスト科学の構築」というプロジェクトを通じて、どのような知見を得ることができたのでしょうか。

佐藤：私にとって非常に大きな意味を持っているのは、史料とはなにか、テキストとは何かということに関して、かなり徹底して考える機会を持ったことです。その結果、先ほど申しあげました、歴史は川上から川下へただ流れるというのは違うのではないかという考えに至ったわけです。これは、ポストモダンのと言えましょう。そのことに懸念を持つ人はたくさんいると思います。正直、はっきりそういうふうに言われたこともあります。しかし、どうでしょうか。人類の知的な営みの中にはまだ十分踏破していない世界があるはずで、口幅ったい言い方ですが、そういった世界のひとつを垣間見たという感じはあります。ある別の人からは、「もう昔のような歴史研究はできませんね」と言われましたが、さすがにそこまで考えているわけではありません。ともかく、融通無碍と言われても仕方ありませんが、私のすべての思考が以前とは決定的に違って来たことは確かです。

クリオ：先生が得られたものを、もう少し詳しくお聞かせいただけないでしょうか。

佐藤：このCOEプロジェクトの最終報告書を読んでいただけるとわかりますが、そこで歴史テキストとは意味のシステムであるとの考えをはっきり書きました⁴⁵。私はルーマンのシステム論に非

⁴¹ Michel Zimmerman 「*Textus efficax: enonciation, révélation et mémorisation dans la genèse du texte historique médiéval. Les enseignements de la documentation catalane (Xe-XIIe siècles)*」佐藤彰一編『「統合テキスト科学の構築」第4回国際研究集会報告書 歴史テキストの生成 テキスト/コンテキスト』(名古屋大学大学院文学研究科 2005)、137-56頁。

⁴² 報告書は、クロード・カロツィ&佐藤彰一編『「統合テキスト科学の構築」第8回国際研究集会報告書 歴史・フィクション・表象』(名古屋大学大学院文学研究科 2007)。

⁴³ パトリック・ゴーチエ＝ダルシェ(永田道弘訳)「中世における地図表象 コンテキストと機能」佐藤彰一編『歴史・地図コンテキストの生成』、79-85頁。

⁴⁴ 山辺規子「書評：高山博・池上俊一『西洋中世学入門』(東京大学出版会 2005)」『史学雑誌』第115編第10号(2006)、104-12頁。

⁴⁵ 佐藤彰一「歴史テキスト生成の論理」『21世紀COEプログラム「統合テキスト科学の構築」 統合

常に多く学んだのですが、テキストと環境——この環境はコンテキストと言い換えることができますが——の関係を、ひとつのシステムと捉えるわけです。ルーマンに関しては、以前から村上淳一先生のお仕事にずいぶんと学んでおりました⁴⁶、おなじく先生が訳されたヴィレム・フルッサー (Vilém Flusser) の影響も大きいものがあります⁴⁷。テキスト科学をコミュニケーションの問題として考える発想は、その影響のあらわれであろうと思うのです。コミュニケーションに内在する不確定性、不安定性は複雑系の一面であると考えられます。そうした性格の問題を解くためのツールとして、意味システム論は魅力的な理論装置に思えました。そこでテキストと環境の関係になるわけですが、この両者の関係は常に変動しているわけです。私たちに残された歴史テキストというのは、その変動のひとつの局面を伝えているのは確かであると思います。しかし、それは環境の変化によっては別のバージョンにもなりうるわけです。そういたしますと、そこで問題になるのはコンテキストであり、私たちに残されたテキストを生み出したコンテキストとは何かということを考えざるをえません。そのような考え方に立ちますと、歴史家がテキストを不動のものとする考えから離れ、そのテキストを作り出した世界に思いを馳せるとき、違った思考があらわれるはずで、そうした考え方は、歴史学の学問的営為の中で、地平を広げる作用があると言ってもよいだろうと思います。

クリオ：先生が具体的に念頭に置かれているテキストは、トゥールのグレゴリウス『歴史十書』ですか⁴⁸。

佐藤：それもひとつの材料としてあげましたが、あれだけでは十分ではないと思います。私の友人であるパリ第4大学のミシェル・ソ (Michel Sot) のお弟子さんで、最近博士号を取得したマガリ・クメール (Magali Coumert) という若い女性の研究者がいます。2005年の11月末ですが、パリ第4大学にオリヴィエ・ブリュアン (Olivier Bruand) が提出した教授資格取得論文 (アビリタシオン) の審査委員を依頼されて⁴⁹、私がたまたまパリに1週間ぐらい滞在していたときに、ソ家であったパーティーで会いました。彼女の博士論文の審査委員を務めたウィーンのリッター・ポール (Walter Pohl) も来ていて、非常に有意義な時間をすごすことができました。中世史の方はご存知かと思いますが、民族移動期からポスト・ローマ期にかけて、各民族には独特の民族成立史がありますよね。彼女の学位論文は、ヨルダナーネスの『ゲティカ』、パウルス・ディアコヌスの『ランゴバルド史』、トゥールのグレゴリウスの『フランク史』、ベーダの『イングランド教会史』という4つのテキストを取り上げて、時代によってそれぞれの記述内容が変化するのはなぜなのか、そこにはどんな意味があるのかを問うた研究です。そのクメールの博士論文のレジュメが最近、ゲッティンゲンにある在ドイツ・フランス歴史研究所 (Mission Historique Française en Allemagne) の紀要に掲載されていました⁵⁰。以前はミシェル・パリス (Michel Parisse) がその中世史部門のメンバーでしたが、昨年までフィリップ・ドゥブルーが後任者としてあたっていて、数年前からその紀要を送ってくれていたのです。結局、彼女の研究の結論は、私に非常に近い立場でした。つまり、民族成立史の内容が時代によって異なるのは、時代のコンテキストによって中身が決まるからだという考えを徹底

テキスト科学の地平 最終報告書』(名古屋大学大学院文学研究科 2007)、1-45頁。

⁴⁶ たとえば、ニクラス・ルーマン (村上淳一・六本佳平訳) 『法社会学』(岩波書店 1977)；村上淳一『現代法の透視図』(東京大学出版会 1996)；同『システムと自己観察：フィクションとしての「法」』(東京大学出版会 2000)。

⁴⁷ ヴィレム・フルッサー (村上淳一訳) 『テクノコードの誕生：コミュニケーション学序説』(東京大学出版会 1997)。

⁴⁸ トゥールのグレゴリウス (兼岩正夫・臺幸夫訳) 『歴史十卷 (フランク史) (上) (下)』(東海大学出版会 1975-77)。

⁴⁹ Olivier Bruand, *Le pouvoir sur la terre et les hommes en Autunois VIIIe - mi XIe siècle* (2005)。

⁵⁰ Magali Coumert, *Les récits d'origine des peuples dans le haut Moyen Âge occidental, du milieu du VIe siècle au milieu du IXe siècle*, in: *Bulletin d'Information de la Mission Historique Française en Allemagne* 42 (2006), p. 153-59.

させた主張です。たとえば、7世紀ごろにフランク人の起源はトロイであるという言説がありますが、9世紀のリジュー司教フレクルフスは、トロイではなくスカンジナビアの辺りにあると書いているのです。それは、ルイ敬虔帝の時代にフランク勢力が北欧と頻りに交渉を持つことによって世界が開け、それに合わせて民族起源の言説が書き換えられていった、つまり、テキストの内容は時代のコンテキストと深い関わりをもって決定されるという論理を、非常にはっきり打ち出した仕事のようなのです。まだ完全なバージョンは出版されていませんが、近々「Études augustiniennes」叢書に入るようです。ですから、コンテキストを考慮してテキストを読むべきだと考える人は、フランスの若い人たちの間でも育ってきているようですし、昨日たまたま見た新刊書案内でも、ビザンツ学者による歴史叙述のコンテキスト論を扱った国際会議録がありました。それからまだ一部しか読んでいませんが、ジョルジュ・デュビーの『ブヴィーヌの日曜日』、ルロワ・ラデュリイの『ラングドックの農民』、そしてル・ゴフの『煉獄の誕生』のような評価の高い叙述や研究書が、いかに語りの論理の負荷が重くのしかかった作品であるかを論じた、最近ドイツで出た研究もそうでしょう⁵¹。こうした立場の根本にあるのは、歴史叙述は文学作品の物語と根本的には違わないという発想だと思うのですよ。どのレベルを根本的とするのが問題で、あまり安易な言い方をしてはいけないと思いますが。

(14) 歴史叙述と物語

クリオ：いま、歴史叙述と物語は根本的には異ならないとおっしゃいましたが、そのような考え方は、伝統的な歴史学とは別のところから着想を得ているのでしょうか。

佐藤：そういうことになると思います。書かれたものは動かさない前提として、それを解釈していくというのが、基本的な従来の研究ですよ。しかし、その書かれるという現象はいったい何かを突き詰めていったときに、それはさほど単純なことではない。何事かが書かれるにあたって、書く主体に何が影響しているかということを考えなければいけません。そして、物事はストーリーなしに語られることはできない、テキストが意味をもつためには、必ずその背後にストーリーがある、というのが私の基本的な考えです。COEの最終報告書にも書きましたが、オルレアン公ルイの暗殺についてのベルナル・グネ（Bernard Guéné）の著名な書物の巻頭に、暗殺の現場を見てきたかのような叙述があります⁵²。その際、暗殺者の行為を、一挙手一投足を詳細に、可能な限り細かく叙述してしまうと、かりにそれが正しい描写であったとしても、これはおそらく意味を失ってしまうでしょう。言ってみれば、暗殺者10人の身体、スローモーション的な肉体、関節の動きという即物的な記述でしかなくなるわけですよ。それが暗殺という行為になるのは、それに意味を与えるストーリーを前提にして、ストーリーに不必要な細部は捨象するからでしょう。テキストが意味ある塊として立ちあられるのは、そこにストーリーがあるからだだと思います。

クリオ：ここで先生のおっしゃるストーリーとは、いわゆるグランドセオリーとは別ですか。

佐藤：全然ちがいます。テキストに盛られた中身が意味作用をもち、読者に対してある意味を与えるということです。それは政治的な底意であったり、人間的な共感であったり、時代の雰囲気であったり、こういう事実があったのかという了解であったり、様々だと思うのですが。

クリオ：それでは、先生のおっしゃるストーリーというのは、読者を前提に作るということでしょうか。

佐藤：必ずしも読者を想定するわけではありません。かつてダダイストたちのなかに自動書記という着想があって、意味もなく思いついたことをばあっと書く。それは要するに作為されたものを忌避するひとつの芸術に向かっていたのですが、ほとんどテキストとして意味を持たないでしょ

⁵¹ Axel Rüth, *Erzählte Geschichte. Narrative Strukturen in der französischen Annales-Geschichtsschreibung*. Berlin / New York: Walter de Gruyter 2005.

⁵² Bernard Guéné, *Un meurtre, une société. L'assassinat du duc d'Orléans, 23 novembre 1407*. Paris: Gallimard 1992.

う。どういう場合であれ、意味のない文章を書くというのは大変なことだと思います。人間は何かの形で意味づけをしますから。

クリオ：ストーリーといった場合、史料作成者が意図したストーリーと、歴史家が史料に問いかけることで初めて歴史が立ち上がってくるという意味での読み手のストーリーの2つの層がありますが、意味が発生するのは、その双方向からの出会いの中のように思います。それで、佐藤先生が今おっしゃっているのは前者のストーリーのことだと思いますが、それでは読み手の側がつくるストーリーについて、先生はどのようにお考えですか。

佐藤：読み手の側のストーリー作成は、グランドセオリーの構築と深く関わり、非常にアクチュアルな問題だと思います。グランドセオリーの中で一番わかりやすいのはマルクス主義的歴史理論ですが、あれは事象のなかにグランドセオリーの証明になる事実を解釈学的に見つけていくというやり方ですよね。それはそれとして、解釈できる部分が多分あるだろうということは否定できません。しかし、難しい問題ですが、そこにはずいぶん大きなズレがあると思います。グランドセオリーというのは、大きなコンセプトを使うわけですよね。たとえば奴隷制を考えてみましょう。奴隷制という理解の枠組を用いようとした場合、どんな名前でもいいのですがたとえばアフエリクスという名前の奴隷身分の個人がいたとしましょう。ある立場の記述では、この人物を奴隷の概念で整理します。確かにそうなのですが、そこで問題なのは、はたしてその捉え方で語られている実体の身の丈にあった捉え方がされているかという点です。述語と実体のズレがあまりにも大きすぎると、それは現実を反映しない解釈に必然的になってしまうわけです。たとえば、その奴隷的な存在ひとりを材料として奴隷を語るか、あるいは千人の多様な奴隷を材料にして概念構築したうえで奴隷制の分析に移るか、ずいぶん違ってくるでしょう。ですから、歴史においては、概念操作をする場合、掘るべき材料の多寡が決定的な違いを生み出すように思います。またコンテクスト論の観点からすると別の問題が出てきます。このアフエリクスという奴隷が、生まれながらの奴隷ではなく、もともとはスキタイ人の支配層出身であったのが、戦闘で捕虜になった人物であったとしましょう。そうすると、はたして彼を「奴隷」の範疇で捉えるべきかどうか、かなり微妙になってきます。結局歴史家が最終的に判断しなければならないという選択の問題になっていきます。そしてその選択にあたって前面に出てくるのは、歴史家がどの切り口から、つまりどのコンテクストで奴隷を捉えるのかということにならざるを得ないでしょう。

クリオ：先ほども通史の話が出ましたが、初期中世でも中世全体でもよいのですが、大きな通史を書こうとした場合は、どうしてもある程度、叙述の流れを決定するその書き手個人の主観というものが出てくるように思います。おそらく出てこないと思える個性豊かな通史は書けないと思うのですが、佐藤先生は、仮に御自身で執筆される場合、どのような見方を出そうとしているのでしょうか。

佐藤：今までの議論を踏まえて言うと、グランドセオリーなしに歴史が描けるかということでもありますよね。それは無くても書けそうな気がします。ただし、セオリーとしてはありませんが、個別のことがらの判断はあると思います。これはポストモダンのかもしれませんが、ア priori にひとつの終着点を想定しない、しかしそれにもかかわらずある統一性を持たせるやり方はあると思います。古いありきたり言い方ですが、それはやはりその人、歴史家個人が持っている価値体系じゃないでしょうか。それが表れるからこそ、個人が通史を書く意味も出てくるのではないかという感じはします。

クリオ：それでは、佐藤先生は具体的にどのような価値に基づいて通史を描こうとするのでしょうか。

佐藤：歴史の様々な場面や局面を思い浮かべながら、私ならばこうしただろうなという判断はあります。けれども、現実にはその種の判断が実際にできるほど豊富な材料がある場合は多くはありません。つまり、私が知っている史料の数というのは限られていますし、とくに中世初期にはそうです。私は非常に旧弊な人間ですから、人間の能力というものを大切だと思う一方で、人間の徳というものもあまり無視できないのです。ありきたりなものです。たとえば誠実さとか勇気とかいったもの

です。歴史上の人物の中に気持ちの上でコミットできる人がいるわけですし、できない人もいるわけです。最終的にはそういうことが、通史を書く際にどこかで関わっていくのだと思います。

クリオ：人間の徳ですか。

佐藤：私は、山川出版社の『新版各国史フランス史』で、非常に短いですが、15世紀までの通史めいたものを書きました⁵³。そこでは、それぞれの国王に対して、今申し上げたような非常にありきたりな古臭い判断をしています。しかし私は、そうした判断は嫌いではありません。もう少し読み込んで様々な材料を得られれば、もっと違った国王像も描くかもしれません。もちろん、支配者だけではなく、被支配層の民衆的なものにも興味はあるわけですが、中世後期のフランス国王について書かれることがこれまで少なかったので、あえて書いてみました。可能であれば、フランス中世全体の通史をもっと詳しく書いてみたいと思いますが、はたしてそれだけの能力が私にあるかどうか。せいぜい書けるのは中世初期ぐらいではないかと思いますが…。通史という観念自体が歴史の全体性とどこかでつながっていると思いますし。そうしたパースペクティブをもたないで歴史を勉強することは寂しいことだと思います。皆さんのような若い人は、いつか全体史を書こうという野心をもって勉強して欲しいと思います。

(15) 国際的な学术交流の場

クリオ：COEプロジェクトはこの3月をもって幕を閉じますが、国際研究集会のように日本から欧語で発表する場を設けることの意味はどこにあるのでしょうか。

佐藤：これまでの西洋史学は、おおむね英独仏で書かれた大先生の立派な仕事を拝読するという感じでした。もちろん例外的な場合があるのは、私もよく承知しています。その上での話ですが、これからは若い人たちは、欧米の研究者を自分たちと同じ身の丈とまではいかなないけれども、それに近い形で積極的に交流をしていくことは必要でしょう。むしろ夜郎自大になってはいけません。そうした機会はなるべく私たち年寄りが、できる範囲で作っていくべきだと思います。これまではお金の問題が大きかったのですが、最近はさまざまな形の競争資金がありますので、その問題はクリアできることが多くなってきました。ですから、研究者のなかでチームワークさえあれば、国際的な共同研究集会を開催して、しかるべき出版社から出してもらえようような水準のプロシーディングを作り出すことができるでしょうし、ぜひそうしなくてはいけないと思います。

クリオ：今のところ、欧文で執筆した原稿を掲載できるメジャーなヨーロッパ史の雑誌は、日本にはありません。そういったもの支援することは可能でしょうか。

佐藤：それは可能だと思います。と申しますか、本当はやらねばなりません。もちろん問題はありまして、一つは継続的な財政面での支援、さらに大変なのはレフェリー作業です。それから掲載言語のことも考えねばなりません。あまり多言語だと雑誌自体のインパクトも削減されますから、可能ならば1カ国語がいいのですよね。現状を考えると英語でしょうが、その場合、ただ学術用語として意味がわかるというだけではなく、ある種のディーセントなテイストを持った英語が要求されるでしょう。なにしろ文科の学問ですから。そうしたことを考えると結構大変な作業ですが、これだけ多くの人が英語を使える時代になっていますから、不可能ではないでしょう。私たちも『SITES』という欧文雑誌を4号まで出しました。名古屋大学には、日本語のすごくできるフランス人教師や、フランス政府留学生試験をトップで受かり、高等師範学校に留学した若いスタッフがいますので、フランス語であれば今後とも年に1冊雑誌を出し続けることはできますね。

クリオ：その『SITES』には、先生もいくつかフランス語の論文を執筆されましたね。

⁵³ 佐藤彰一「ポスト・ローマ期から中世へ」、「中世フランスの国家と社会」福井憲彦編『新版世界各国史 フランス史』（山川出版社 2001）、55-143頁。

佐藤：『SITES』は海外のさまざまな研究機関に送ってあります。以前ピエール・トゥベールさんが『Le Moyen Âge』に新しい雑誌として紹介しようと言ったのですが、彼、書いてくれていませんね（笑）。ただ、フィリップ・ドゥブルーは最近出版された復讐に関する論文集で、私が『SITES』に書いたトゥールのグレゴリウス論を取り上げて、そこで雑誌の紹介もしています⁵⁴。先ほども述べましたが、実はこの論文集のもとになった2004年にローマで開かれたコロキウムに、私は報告者でなかったにもかかわらず、たまたまヨーロッパにいたので招待されました。その時、ドゥブルーが、トゥールのグレゴリウス『歴史十書』第7書47章と第9書19章で叙述される有名なシカリウス事件を材料として報告をしたのですが、私はその時手を挙げて、「その箇所のエピソードには続きがあって、第9書30章とワンセットにして読まなければいけない」と指摘しました。ドゥブルーはそれには気がついていなかったらしく、その場では不機嫌そうな顔をしていましたが、活字の中では『SITES』に載せた私の見解を長々と引用していました⁵⁵。彼は、最終的には私の見解に与してはいませんが、私のような読み方も可能であるという点は認めてくれました。ですから、『SITES』に欧文で掲載することで、多少なりとも国際的な反応はあったということです。そのあと、先ほども申しあげましたファルネーゼ宮で晩餐会があったのですが、ヨーロッパ外からの出席者としては私のほかに、バーバラ・ローゼンヴァイン（Barbara Rosenwein）やパトリック・ギアリ（Patrick Geary）、それから『儀礼の危機』を書いたフィリップ・ビュックもいました⁵⁶。彼はジャック・ルゴフの弟子で、今はスタンフォード大学にポストがあります。彼とも仲良くなって日本に招く約束をしているのですが、あちらの都合もなかなかつかなくて実現していません。ともかく、これからは名古屋大学のCOEだけではなく、日本全体を見回して、中世研究のための欧文発表の場をつくりたいと考えています。

クリオ：佐藤先生は『史学雑誌』に寄せられたエッセイで、少人数でもよいので若手の大学院生クラスが安心して学べる施設をつくったほうがよいと提言しています⁵⁷。今回のグローバルCOEでそういったプログラムは考えていらっしゃるのでしょうか。

佐藤：正直そこまでは考えていません。フランス・ローマ学院（École française de Rome）のような環境を想定されているのでしょうか、かなり大変なことなのですよ。つまり、フランス・ローマ学院は——アメリカ・ローマ学院（American School of Rome）やイギリス・ローマ学院（British School of Rome）などがそうかは確認していませんが——単なる研究機関ではなく、外務省管轄の外交機関です。ですからフランス・ローマ学院の院長や研究員は外交官パスポートをもっていると思います。彼らは国を代表しているということになります。そうでなければローマの学者社会で同じレベルの交流をすることは難しいでしょう。そういうわけで、日本がそのような機関を作りたいのであれば、全面的に国のサポートが必要です。ただ、今であれば、十分作れる条件は整っていると思います。中世史だけではなく、古代史も、近代地中海史も、美術史も、あちらに個人的なコネクションをもっていらっしゃる方は何人もいます。あとは文科省がそういう組織をつくる際に、外務省との折衝を煩を厭わずやってもらえれば、ということです。ただ、これは省庁間の権益問題にかかわりますので、微妙で大変です。もちろん、構造改革ということでそれが可能になれば、私は諸手を挙げて賛成します。仮に最初のうちうまくいかないとしても、そんなのは初めからうまくいくはずはありませんから、試行錯誤しながら形を整えていけばよいと思います。

⁵⁴ Philippe Depreux, Une faide exemplaire ? A propos des aventures de Sichaire: vengeance et pacification aux temps mérovingiens, in: Dominique Barthélemy, François Bougard & Régine Le Jan (éd.), *La Vengeance, 400-1200* (Collection de l'École française de Rome 357). Roma: École française de Rome 2006, p. 68-85.

⁵⁵ Shoich Sato, Texte de silence ou silence du texte: essai de déconstruction des *Historiarum Libri Decem* de Grégoire de Tour, in: *SITES: Journal of Studies for the Integrated Text Science* 1-1 (2003), p. 13-29.

⁵⁶ Philippe Buc, *The Dangers of Ritual: Between Early Medieval Texts and Social Scientific Theory*. New Jersey: Princeton UP 2001.

⁵⁷ 佐藤彰一「ヨーロッパに国立歴史研究所を」『史学雑誌』第112編第1号（2003）、34-36頁。

(16) グローバル COE へ

クリオ：最後に、次期グローバル COE についてお話いただけませんか。

佐藤：今回のグローバル COE では、教育に、しかも文字テキストに特化しています。現時点で採択されるかどうかは不明ですが、採択されれば確実に COE の第 2 段階として、国際的なアカデミアでさらにいっそう存在感を強める自信はあります。

クリオ：「統合テキスト科学の構築」では文字だけではなく、すべてのテキストに通底する普遍文法の解明ということでしたが、今回はなぜ文字に特化するのでしょうか。

佐藤：それは中でもいろいろ議論があったのですが、博士課程後期課程の教育というのは非常に重要なファクターなのです。研究だけでしたら正直なところかなり冒険的なことをやってもおおよそ被害というのはそれほど多くはありませんが、教育となると話は別です。表面的には少し後退したように見えるかもしれませんが、生煮えの議論を使って教育することはできないでしょう。やはり文字・言語テキストは蓄積が非常に厚いですし安定した理論も研究もあるので、そこに特化するのがベターではないかと考えたのです。少なくともプロジェクト期間の 5 年間は文字テキストに収斂させますが、そのあとは分かりません。古典回帰的な発想が強くなるかもしれませんが、ガダマーの言う解釈学的な (hermeneutic) 教育と研究といたらよいのでしょうか。もちろんあれこれの議論がありました、人文学は、実証主義というある種の科学主義、そうした 19 世紀に作られた科学主義からすこし身を引き剥がしたほうがいいのかという考えが私たちにはありました。この部分はかなり新しい発想だと思います。そして、それは終了した「統合テキスト科学の構築」で推進した、すでに私たちの目の前にある既成の「顕在テキスト」だけではなく、その背後にある無限数の「潜勢テキスト」も含めたテキスト論を構築するという発想にもつながります。とりわけこの点は、文学畑の松澤和宏さんが実質的な中心となって、ジェラルド・ジュネット (Gerard Genette) の文学理論で言われている「テキストの布置」を中軸概念として組み立てています。

5. 最後に

(17) 今後の予定

クリオ：それでは、今後進める予定の研究について、お話いただけますでしょうか。

佐藤：それはたくさんあります。1 つは、講義ノートでオリジナリティがある部分を出版することです。1991 年と 92 年に特殊講義で取り上げた話で、古代から中世初期にかけての修道制にかかわることですが、なぜ人は禁欲をするのかという問題です。この禁欲の文化は、ヨーロッパ以外の世界にもありますが、4 世紀という特定の時代になぜあれほどフィーバーのような現象になって、支配層に属する人まで取り込んでいったのか、十分解明されているとは思いません。私にはこれは近代にいたるまでヨーロッパ文化の本質に根ざした伝統として保持されてきたと思うのですが、この伝統が創出されたのが後期古代と呼ばれる時代です。これはかなり分厚いものになると思うのですが、ぜひ一冊の本にしたいと考えています。もちろん、講義ノートをすべて換骨奪胎して組みなおさなければいけませんし、古代史に関わる部分も大きいのもっと調べなければいけないのかもしれませんが、2 つ目は、英語もしくはフランス語で、メロヴィング国家論を書くという企てです。これは、長年メロヴィング朝を研究してきた私にとって、課せられた職業的義務だろうと思っています。そして翻訳ですね。

クリオ：それはどのような翻訳なのでしょうか。

佐藤：ちょっと唐突かもしれませんが、今、アルナルド・モミリアーノ (Arnaldo Momigliano) の史学史的な研究をずっと読んでいます。これが殊のほか面白くて、仕事の合間を縫って自分で楽しみながら訳しています。もちろん古代史家としてのモミリアーノの名前は以前から知っていましたが、近世の史学史にかかわる彼の仕事はまったく知りませんでした。

クリオ：史学史とおっしゃいましたが、どのような内容なのでしょう。

佐藤：近世・近代の史学史それ自体が非常に面白いものであるのですが、たとえば、なぜ大学での歴史学の講義は、他の諸人文科学に比べてかくも遅かったのか、という問題ですね。他にも、歴史学とは何かということを考えるうえで非常に重要なことを論じています。これは、プリンストン大学教授のアンソニー・グラフトン（Anthony Grafton）が序文を書いている3巻本のドイツ語版モミリアーノ選集に入っているのですが、そこに古代史プロパーの論文は半分も収められていません⁵⁸。ギリシア・ローマの歴史家論も含めて、史学史的なものが中心です。聞くとところによると、ドイツではいまモミリアーノを非常に高く評価する動きがあるそうです。そもそもこれだけ大きな翻訳選集ができること自体が、そのあらわれなのでしょう。これ以外にも翻訳したいものはありますが、あまり大きなものは体力的に無理でしょうから、それほど膨大な仕事を要求しない、しかし翻訳する意義のある書物となるのでしょうか。最後に、先程も申し上げましたが、日本語でフランス中世の通史を書きたいと考えています。

(18) 若手研究者へ

クリオ：それでは最後に、大学院から博士論文執筆前後の若手に向けて、先生から何か一言ありますでしょうか。

佐藤：もちろん、一言以上あるのですよ（笑）。これは一種の心構え論ですが、なによりも大事なことは、絶対に自分の能力を信じるということです。この点はまず前提にしておきたいですね。それから、研究に時間を割くということです。これは、なかなか今のような時代状況のなかでは難しいかもしれませんが、歴史家の場合は学殖として蓄積されているものがどれだけかによって、その議論が決定されるという側面があります。これは動かしがたい事実です。私の知っているフランスの歴史家の中で、不勉強だなと思う人はひとりもいません。誰もが、膨大な時間を勉強に割いています。その中でも、ドミニク・バルテルミは特別ですけどね。あの人の集中度たるや、凄まじいからです。これは学者として当然のあり方だと思うのですが、日本では必ずしもそうではありませんね（笑）。それから、亡くなって随分と時間が経っていますが、マルク・ブロックですね。

クリオ：ブロックですか。

佐藤：はい。ブロックは、今の現役の歴史家に比べれば、必ずしも多くの作品を世に出しているわけではありません。まとまった著作といえば、『封建社会』の他には、最初の短い『イル・ド・フランス』とか『国王と農奴』、そして『フランス農村史の基本性格』と『王の奇跡』くらいじゃないでしょうか⁵⁹。しかし、彼の2巻本の論文集を見てください⁶⁰。そこに一覧となっている書評たるや、膨大な量です。確かに、一つ一つの書評自体はたかだか1ページくらいの短いものですが、書評を書くためには書評のもとになる本を読まなければなりませんし、書くのは思うほどに短時間ではないかもしれません。これはブロックの晩年に接した人たち、つまりレジスタンス運動に入る直前に接した人たちが異口同音に言っていることですが、とにかくブロックは朝から晩まで仕事をしていたそうです。

クリオ：なぜブロックは、実証研究に捧げる時間を割いてまで、書評を書いたのでしょうか。

佐藤：それは彼が、盟友リュシアン・フェーヴルとともに1929年に新しく創刊した雑誌、つまり『アナール』を、素晴らしい雑誌にしようという責任感があったからではないでしょうか。それは一般

⁵⁸ Arnaldo Momigliano, *Ausgewählte Schriften zur Geschichte und Geschichtsschreibung*, 3 Bde. Stuttgart: Metzler 1998-2000.

⁵⁹ Marc Bloch, *L'Île-de-France. Les pays autour de Paris*. Paris: Le Clef 1913; Id., *Rois et serfs. un chapitre d'histoire capétienne*. Paris: Champion 1920; マルク・ブロック（河野健二他訳）『フランス農村史の基本性格』（創文社 1959）；同（堀米庸三監訳）『封建社会』（岩波書店 1995）；同（井上泰男・渡邊昌美訳）『王の奇跡』（刀水書房 1998）。

⁶⁰ Marc Bloch, *Mélanges historiques*. 2 tom. Paris: EHESS 1963.

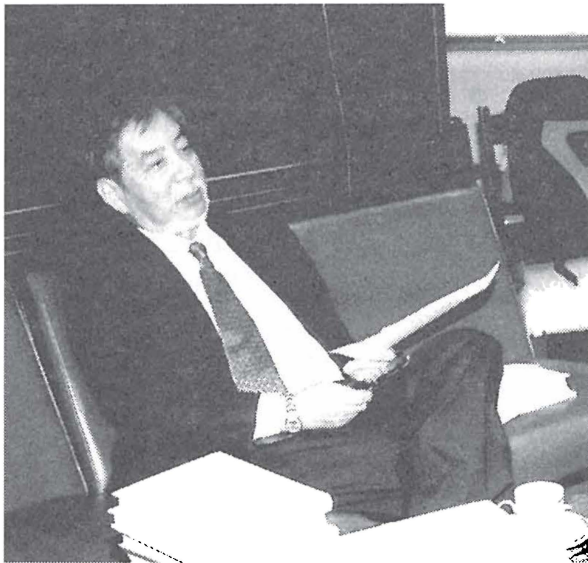
的な面ですが、これと並んで歴史学がこれからはこうあって欲しいと具体性をもって先導するには、書評が絶好の媒体になるという点に着目したからだと思います。言ってみればブロックにとって『アナル』は、一種の COE プロジェクトだったわけです。そしてそのプロジェクトがずいぶん長く続いたために、あれだけ膨大な書評となったということでしょう。だから、ブロックほどの水準の人であれほどの研鑽をしていたことを考えると、彼ほどの能力のない私なんかは、それこそ拳拳服膺して見習わなければいけない。歴史家たるものは、あらゆることに関心をもち、幅広い読書をし、そしてあらゆる問題についてそれなりの解答ができるような資質を身につけねばなりません。これはおそらく現在の学生、院生、若手研究者にとって最も必要なことでしょう。そういう平凡なところに、一番大切なものがあるのだと私は思うのです。

クリオ：おっしゃるとおりです。

佐藤：ブロックは偉いですよ。しかし、彼の偉大さはまだ半分しかわかってないのだと思うのです。インタビューの前に少し話をしたのですが、彼は歴史学だけではなく、おそらくフランス社会全体の改革を夢見ていたのだと思います。教育制度もそうですが、『奇妙な敗北』を読めば、軍隊社会だけでなく、フランスという国家組織全体を組み替えるべきであるという考えを持っていたことがわかります⁶¹。私にはもちろんそこまではできませんので、歴史学の教師という自分の置かれている役割の中で考える以外ないのですが、こんなところでしょうか。

クリオ：長時間にわたり、どうもありがとうございました。

佐藤：ただ時間を費やすだけの話しかできなかったのではないかと危惧していますが、少しでも皆さんのお役にたてれば幸いですし、非常に楽しい時間を過ごすことができました。私はもっぱら話をする側でしたが、聞く側がおられませんと思考が弾みませんからね。自分で考えながら話しているうちに、これまで気がつかなかったことで、気づかされたがことも少なくありません。どうもありがとうございました。



2007年3月20日

東京大学・西洋史学研究室・教員談話室にて

聞き手: 加納 修、小澤 実、山本成生、向井伸哉

矢吹 啓、清水 領、小川祐樹

構成: 小澤 実

⁶¹ マルク・ブロック（平野千果子訳）『奇妙な敗北 1940年の証言』（岩波書店 2007）。